

長崎県文化財調査報告書 第216集

都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

Ⅲ

立小路遺跡

2018

長崎県教育委員会

長崎県文化財調査報告書 第216集

都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

Ⅲ

たて しょう じ い せき
立 小 路 遺 跡

2 0 1 8

長崎県教育委員会



SK01 (右)・SK02 (左) 掘削状況



調査区全景と都市計画道路（諫早方面を見る）（北西から）

序 文

本書は、都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として平成28年度に実施した立小路遺跡の発掘調査報告書です。

長崎県教育委員会では、都市計画道路池田沖田線街路改築工事について、建設計画段階より埋蔵文化財保護に努めるべく、県央振興局道路第二課と協議を行ないながら、取り扱いについて検討してきました。その結果、今回は記録保存のための調査を行うこととなりました。

今回の調査では、縄文時代晩期から中世にかけての遺構、遺物が出土しました。主な内容としましては、縄文時代晩期の埋甕や弥生時代中期頃の堅穴建物跡、中世の掘立柱建物跡などが見つかりました。また、遺物も遺構同様の年代に相当するものが多く出土しています。

埋蔵文化財は、私たちの祖先から受け継がれた貴重な文化遺産であり、記録・保存し次代へ伝えていくことが私たちに課せられた責務であります。これらの資料が、当時の地域社会や歴史を知るための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり、発掘作業に従事した方々をはじめ、多大なご尽力をいただきました関係者の皆様に対し厚く御礼申し上げます、刊行のあいさつといたします。

平成30年3月

長崎県教育委員会教育長
池 松 誠 二

例 言

1. 本書は、都市計画道路池田沖田線街路改築工事（事業主体：長崎県県史振興局道路第二課）に伴って実施した、長崎県大村市鬼橋町169番地ほかに所在する立小路遺跡^{たてしょうじ}の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所が主体となり、株式会社大信技術開発及び扇精光コンサルタンツ株式会社の支援を得て行った。調査期間は以下の通りである。
試掘調査 平成27年1月26日～平成27年2月20日
本調査 平成28年6月16日～平成28年11月29日
整理作業 平成28年11月30日～平成28年12月28日
3. 遺構および土層実測図は、川畑敏則（県主任文化財保護主事）・小松義博（県文化財調査員）・竹田将仁（株式会社大信技術開発）・織田健吾（扇精光コンサルタンツ株式会社）が行った。また、出土遺物のドットマップ及び地形測量図作成は、織田健吾が行った。
4. 本書の執筆および編集は小松が行った。また範囲確認調査結果については、中尾篤志（係長）・本田秀樹（文化財保護主事）がまとめた結果報告を元に小松が編集して作成した。
5. 本書で用いた座標はすべて世界測地系を用いた。また、方位はすべて真北である。
6. 本書に掲載した遺構実測図の縮尺は20分の1か40分の1、もしくは60分の1である。遺物実測図の縮尺は、土器は3分の1もしくは4分の1、石器は2分の1、3分の1、3分の2、4分の1のいずれかである。
7. 遺跡調査番号はTSJ201603である。
8. 本書で使用した遺跡略号は以下のとおりである。
掘立柱建物…SB 堅穴状建物…SC 土坑…SK（※SK1・2は埋亮と判断した）
炉跡…SL ビット…SP 遺物集積…SU
9. 堆積土層の土色は「新版 標準土色帖」農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修を使用し、すべて目測で実施した。

本文目次

I. 調査の経過	1
1. 調査に至る経緯	1
(1) 概要	1
2. 都市計画道路池田沖田線の概要	2
(1) 試掘調査・範囲確認調査の経過	2
(2) 立小路遺跡試掘調査の概要	3
II. 本調査の成果	7
1. 概要	7
(1) 本調査の経緯	7
(2) 調査の方法	7
(3) 整理作業の概要	7
2. 地理的・歴史的環境	11
(1) 地理的環境	11
(2) 歴史的環境	11
3. 調査組織	14
4. 日誌抄録（発掘調査）	14
5. 基本土層	16
6. 遺構及び遺構内出土遺物	21
(1) 埋甕（SK01、SK02）	21
(2) 竪穴建物跡（SC01、SC02）	25
(3) 掘立柱建物跡（SB01、SB02）	31
(4) 土坑（SK）	36
(5) 柱穴（SP）	38
(6) 遺物集積区（SU）・竪跡（SL）	39
7. 包含層出土遺物	44
(1) 1・2層の遺物	44
(2) 3層の遺物	46
(3) 4層の遺物	51
III. まとめ	68

挿図目次

第1図	立小路遺跡試掘坑配置図 (S = 1/400) ……………	4	第28図	SB02出土遺物実測図 (S = 2/3) ……	35
第2図	TP1実測図 (S = 1/60) ……………	5	第29図	SK03実測図 (S = 1/40) ……………	36
第3図	TP4実測図 (S = 1/60) ……………	5	第30図	SK04実測図 (S = 1/40) ……………	36
第4図	TP6実測図 (S = 1/60) ……………	5	第31図	SK05実測図 (S = 1/40) ……………	36
第5図	TP内出土土器実測図 (S = 1/3) ……………	6	第32図	SK05出土土器実測図 (S = 1/3) ……	37
第6図	1・2区 遺構配置図 (S = 1/200) ……………	9	第33図	SK06実測図 (S = 1/40) ……………	37
第7図	3・4区 遺構配置図 (S = 1/200) ……………	10	第34図	SP29実測図 (S = 1/40) ……………	38
第8図	周辺遺跡分布図 (S = 1/50,000) ……	12	第35図	SP29出土土器実測図 (S = 1/3) ……	38
第9図	周辺遺跡分布図 (S = 1/2,500) ……	13	第36図	SU01実測図 (S = 1/20) ……………	39
第10図	試掘・本調査における 基本土層対応図 ……………	16	第37図	SU01出土土器実測図 (S = 1/3、S = 1/4) ……………	40
第11図	土層図対応図 (S = 1/200) ……………	17	第38図	SU02実測図 (S = 1/20) ……………	40
第12図	調査区内土層実測図① (S = 1/60) ……………	18	第39図	SU02出土土器実測図 (S = 1/4) ……	41
第13図	調査区内土層実測図② (S = 1/60) ……………	19	第40図	SU03・SL01実測図 (S = 1/20) ……	42
第14図	調査区内土層実測図③ (S = 1/60) ……………	20	第41図	SU03出土土器実測図 (S = 1/3、S = 1/4) ……………	43
第15図	SK01実測図 (S = 1/20) ……………	21	第42図	1・2層出土土器 (S = 1/3) ……	45
第16図	SK01出土土器実測図 (S = 1/6) ……	22	第43図	1・2層出土石器 (S = 1/2、S = 2/3) ……………	46
第17図	SK02実測図 (S = 1/20) ……………	24	第44図	3層出土土器 (S = 1/3) ……………	48
第18図	SK02出土土器実測図 (S = 1/6) ……	25	第45図	3層出土石器① (S = 1/2) ……………	49
第19図	SC01実測図 (床面検出時) (S = 1/40) ……………	26	第46図	3層出土石器② (S = 2/3) ……………	50
第20図	SC01実測図 (掘り方検出時) (S = 1/40) ……………	27	第47図	3層出土の船載鏡とガラス玉 (S = 1/3、S = 1/1) ……………	51
第21図	SC01出土土器実測図 (S = 1/3) ……	28	第48図	4層出土土器① (S = 1/3、S = 1/4) ……………	55
第22図	SC02実測図 (床面検出時) (S = 1/40) ……………	29	第49図	4層出土土器② (S = 1/3、S = 1/4) ……………	56
第23図	SC02実測図 (掘り方検出時) (S = 1/40) ……………	30	第50図	4層出土土器③ (S = 1/3、S = 1/4) ……………	57
第24図	SC02出土土器実測図 (S = 1/3) ……	30	第51図	4層出土土器④ (S = 1/3、S = 1/4) ……………	58
第25図	SB01実測図 (S = 1/60) ……………	32	第52図	4層出土土器⑤ (S = 1/3、S = 1/4) ……………	59
第26図	SB01 - SP10出土遺物 実測図 (S = 1/3) ……………	33	第53図	4層出土石器① (S = 2/3) ……………	62
第27図	SB02実測図 (S = 1/60) ……………	34	第54図	4層出土石器② (S = 2/3) ……………	63
			第55図	4層出土石器③ (S = 2/3) ……………	64
			第56図	4層出土石器④ (S = 1/2、S = 1/3、S = 1/4) ……	65

図版目次

図版1	都市計画道路池田沖田線位置図……	1	図版31	SC01-SL01焼土検出状況 ……	27
図版2	調査区及び周辺の航空写真……	2	図版32	SC01-SL02焼土検出状況 ……	27
図版3	基本土層 (TP1北壁) ……	5	図版33	SC01-SL02焼土検出状況 (近景) ……	27
図版4	TP1 5層遺構検出状況 (東から) ……	5	図版34	SC01硬化面 (床面) 検出状況 ……	27
図版5	TP4 3層須恵器出土状況 (東から) ……	5	図版35	SC01掘り方完掘状況 ……	27
図版6	TP内出土土器 ……	6	図版36	SC01出土土器 ……	28
図版7	2区空撮 ……	8	図版37	SC02検出状況 ……	29
図版8	4区空撮 ……	8	図版38	SC02土層堆積状況 ……	29
図版9	1区空撮 ……	8	図版39	SC02土抗プラン検出状況 ……	29
図版10	3区空撮 ……	8	図版40	SC02完掘状況 ……	29
図版11	1・2区トレンチ掘削状況 (北から) ……	15	図版41	SC02出土土器 ……	31
図版12	4区SK1、2検出状況 (南から) ……	15	図版42	SB01検出状況 (東から) ……	33
図版13	3区SB01完掘状況 (北から) ……	15	図版43	SB01完掘状況 (北から) ……	33
図版14	2区5層礫層掘り下げ (北西から) ……	15	図版44	SB01・02空中撮影 ……	33
図版15	基本土層 (2区北壁) ……	16	図版45	SB01-SP17土層断面 ……	33
図版16	4区東壁土層堆積状況 (南西から) ……	16	図版46	SB01-SP10出土遺物 ……	33
図版17	SK01検出状況 ……	22	図版47	SB02完掘状況 ……	34
図版18	SK01礫撤去時 ……	22	図版48	SB02-SP05 土層断面 ……	34
図版19	SK01遺物出土状況 ……	22	図版49	SB01・02位置関係 (SB01=実線、SB02=破線) ……	35
図版20	SK01掘り片断面 ……	22	図版50	SB02出土遺物 ……	35
図版21	SK01完掘状況 ……	22	図版51	SK03完掘状況 ……	36
図版22	SK01出土土器 ……	23	図版52	SK04完掘状況 ……	36
図版23	SK02検出状況 ……	24	図版53	SK05出土土器 ……	37
図版24	SK02礫囲い検出状況 ……	24	図版54	SK06完掘状況 ……	37
図版25	中央部礫除去及び下壘検出状況 ……	24	図版55	SP29出土土器 ……	38
図版26	SK02掘り方断面 ……	24	図版56	SU01遺物出土状況 ……	39
図版27	SK02裏込め検出状況 ……	24	図版57	SU01出土土器 ……	39
図版28	SK02完掘状況 ……	24	図版58	SU02遺物出土状況 ……	41
図版29	SK02出土土器 ……	25	図版59	SU02出土土器 ……	41
図版30	SC01検出状況 ……	27	図版60	SU03-SL01検出状況 ……	42
			図版61	SU03遺物出土状況 ……	42
			図版62	SU03出土土器 ……	42
			図版63	1・2層出土土器 ……	45
			図版64	1・2層出土石器 ……	46

図版65	3層出土土器	48	図版69	4層出土土器②	60
図版66	3層出土石器	50	図版70	4層出土土器③	61
図版67	3層出土の舶載鏡とガラス玉	51	図版71	4層出土石器①	66
図版68	4層出土土器①	59	図版72	4層出土石器②	67

目 次

第1表	都市計画道路池田沖田線の 発掘調査履歴（発掘年度順）	2	第12表	柱穴一覧表	38
第2表	TP内出土遺物観察表	6	第13表	SU01出土遺物観察表	40
第3表	SK01出土遺物観察表	23	第14表	SU02出土遺物観察表	41
第4表	SK02出土遺物観察表	25	第15表	SU03出土遺物観察表	43
第5表	SC01出土遺物観察表	28	第16表	1・2層出土土器観察表	45
第6表	SC02出土遺物観察表	31	第17表	1・2層出土石器観察表	46
第7表	SB01出土遺物観察表	33	第18表	3層出土土器観察表	49
第8表	SB02出土遺物観察表	35	第19表	3層出土石器観察表	50
第9表	SK05出土遺物観察表	37	第20表	3層出土遺物観察表	51
第10表	土坑一覧表	37	第21表	4層出土土器観察表	61
第11表	SP29出土遺物観察表	38	第22表	4層出土石器観察表	67

I 調査の経過

1 調査に至る経緯

(1) 概要

都市計画道路池田沖田線の建設は、大村市内の幹線道路事情や狭小幅員の道路網内の市街化といった交通状況に端を発した、街路改築工事として計画された。大村市の中心市街地以南における幹線道路は、国道34号線のみで、朝夕の通勤・帰宅時間や休日には渋滞等の交通混雑が慢性化している。中心市街地の交通状況の改善や地域の利便性の向上は、平時の交通状況のみならず災害等の緊急時への備えとなり、危険な箇所を改め、防災能力の強化へとつながる。また、当該路線の改築は、久原池田沖田線や富の原鬼橋線、国道444号へのつながり、長崎自動車道大村 IC や九州新幹線西九州ルート新大村駅、長崎空港へのアクセス向上に大きく貢献することとなる。

平成15年8月22日に都市計画道路池田沖田線3,420mの延長が決まり、それぞれ小路口工区1,450m（平成20年～26年度）、竹松工区1,970m（平成22年～33年度）と分けられた。小路口工区に関しては、平成27年3月より供用開始となっている。



図版1 都市計画道路池田沖田線位置図（長崎県 HP より）

2. 都市計画道路池田沖田線の概要

(1) 試掘調査・範囲確認調査の経過

都市計画道路池田沖田線街路改築工事予定地内は、今回の調査地である立小路遺跡を中心として考えた場合、北に平野遺跡があり、さらに北には広大な遺跡範囲を持つ竹松遺跡が広がる。平野遺跡より東側には今回の工事予定範囲対象とならなかった川端遺跡がある。南側には小路口遺跡・鬼の穴古墳があり、工事予定地内外に多くの文化財包蔵地が点在する。それらの中で実際の調査対象範囲となった遺跡について表に記載する。



図版2 調査区及び周辺の航空写真（中央やや下方が調査区、奥に大村湾を望む）（南東から）

表1 都市計画道路池田沖田線の試掘・範囲確認調査履歴

調査略号	遺跡名	所在地 (長崎県大村市)	期間	担当	面積 (㎡)	年報	報告書 号数	備考	
TAK201417	竹松遺跡	沖田町133地	20141110～0108	中尾・本田	113	本年度	—	平成27年度調査区A区・B区5480㎡	
TAK201436		竹松町885番地3他	20150217～0220	中尾・本田	16	23	—		
TAK201311		竹松町1042番地1他	20131203～1226	山梨・新井	86	22	報214集	北部は平成26年度調査、南部は継続	
2	TAK201516	竹松遺跡・川端遺跡隣接地・平野遺跡	竹松町2337番地他	20151113～1202	村川・川畑・川淵・瀬内	117	24	未刊	川端遺跡隣接地及び平野遺跡含む。平成28年度及び本年度以降に長崎県埋蔵文化財センターが本調査
3	KBR201605	川端遺跡隣接地	鬼橋町123番地他	20160926～0930	浦田・村川	8	未刊	—	本年度以降に調査
4	HRN201316	平野遺跡隣接地	鬼橋町128番地1他	20140116～0123	山梨・新井	28	22	—	周囲の範囲確認調査結果を待つて判断とするも、ほぼ全面調査へ
5	HRN201425	平野遺跡	鬼橋町21番地1他	20150214～0219	中尾・本田	16	23	—	
6	TSJ201427	立小路遺跡	鬼橋町1169番地他	20150206～0217	中尾・本田	24	23	本年度	1700㎡
7	ORO201207	小路口遺跡	小郡7本町下6路1084-16	20120723～0803	町田・今西	40	21	報213集	2000㎡。県埋蔵文化財センター担当

(2) 立小路遺跡試掘調査の概要

① 調査の経緯

調査地は周知の埋蔵文化財包蔵地である立小路遺跡の遺跡範囲内であり、都市計画道路池田沖田線建設予定地となっていた。このようなことから、平成27年1月26日～2月20日までの期間に試掘調査を実施した。なお、試掘調査は新幹線文化財調査事務所の中尾篤志と本田秀樹が担当した。

調査は、2m×2mの試掘坑をTP1からTP6まで計6箇所を設定し、人力掘削で行った。基本的に基盤礫層である扇状地礫層までの掘り下げを行っているが、氾濫原に伴う砂質土が礫層上に南から北にかけて厚く堆積しており、北側のTP5では深さ1.8mで川砂を確認したため、壁面の崩落等の危険を考慮して礫層の検出を待たずに掘り下げを中止した。

② 土層

1層は二次堆積の包含層、3層は弥生～中世代までの包含層、4層は4a・4bの上層・下層に分けられ、4a層は中世、4b層が弥生後期、そして5層を縄文晩期と考え、4a・4b・5層はそれぞれ遺構検出面となる。鉄分やマンガン等の沈着や含有物、土色などはほぼ同じと思われるが、調査範囲南側のTP1から中央の農道付近のTP4までは粘質土を基調とするのに対し、TP5・6といった北側の試掘坑はやや砂質を帯びている。

③ 遺構

全体で6基の遺構を検出した。内訳は、TP1では最下層の5層上面にてピットを3基検出した。周辺では縄文晩期の浅鉢片が出土していることから、この時期の遺構の可能性はある。TP4では4a層上面においてピットを2基検出した。TP6では5層中においてピット1基を確認した。

④ まとめ

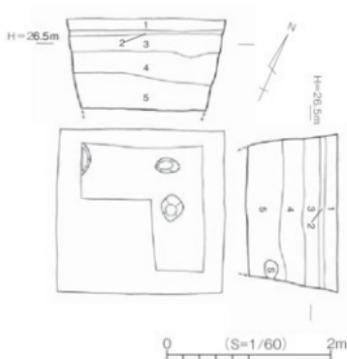
調査の結果から、試掘坑を設定した範囲内で、縄文時代晩期から中世にかけての3面の遺構面が想定される。そのため試掘坑設定範囲の周囲1,700mについては本調査の必要性ありと判断した。

⑤ TP内出土遺物

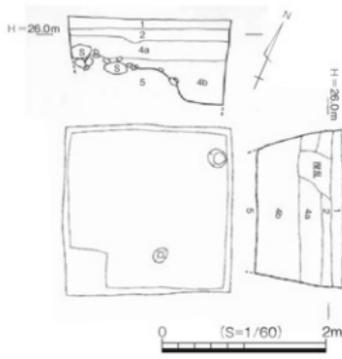
出土遺物は状態が悪いものが多かったため、掲載する遺物はごく一部に留める。1は縄文時代晩期の浅鉢の胴部である。内外面ともに横方向の研磨を施す。2・3は甕の口縁部で内外面ともにナデ調整。口縁部は鋤先形を呈する。長崎県壱岐市に所在する原の辻遺跡の弥生土器・古式土師器編年案(宮崎編年)における須玖Ⅱ式古段階の弥生中期Ⅳ期(中期後葉)に相当する。4は須恵器の甕の口縁部である。調整は内外面ともにナデ調整。内面に当て具の痕がわずかに残る。5は須恵器の捏ね鉢である。調整は内外面ともにナデであり、口縁部は玉縁状を呈する。口縁端部に若干の煤が付着する。6は須恵器の甕の胴部である。調整は内面がタタキ、外面はナデ調整。酸化焙焼成により表面は赤みを帯びた色調となる。7・8は碗の胴部である。体部内面に蓮花文を有する。太宰府条坊跡XVの編年における龍泉窯系青磁碗のⅠ類と思われる。時期は12世紀中頃～12世紀後半。9は近世陶器甕の胴部の二次加工品である。いわゆるメンコとして加工している可能性がある。



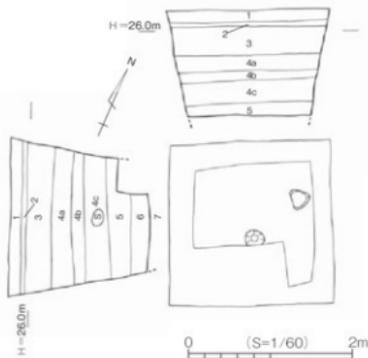
第1図 立小路遺跡試掘坑配置図 (S=1/400)



第2図 TP1実測図 (S=1/60)



第3図 TP4実測図 (S=1/60)



第4図 TP6実測図 (S=1/60)

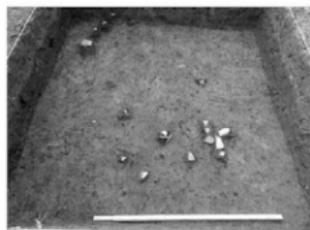
- 1層(褐灰色粘質土)
:水田耕作土・床土
- 2層(黄褐色粘質土):鉄分沈着層
- 3層(黒褐色粘質土):遺物包含層
- 4a層(黄褐色粘質土)
:遺構様出面①
- 4b層(暗褐色粘質土)
:遺物包含層(遺構様出面②)
- 5層(暗褐色壤層)
:基盤層(遺構様出面③)



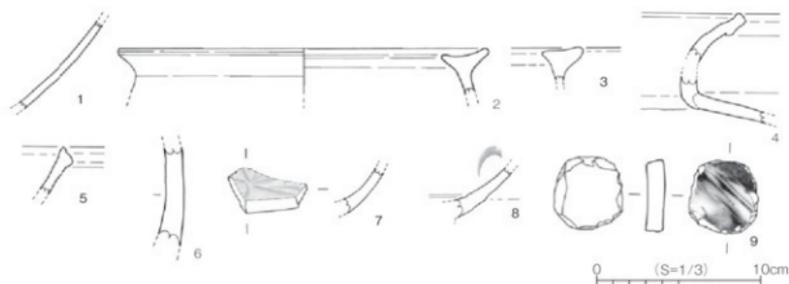
図版3 基本土層 (TP1北壁)



図版4 TP1 5層遺構様出状況(東から)



図版5 TP4 3層須恵器出土状況(東から)



第5図 TP内出土土器実測図 (S=1/3)



図版6 TP内出土土器

表2 TP内出土土器観察表

図版 番号	出土箇所	層位	器種	部位	色調		調整		焼成	胎土	備考
					外面	内面	外面	内面			
1	TP1	4層	浅鉢	胴部	灰褐色 (Hae7.5YR4/2)	灰褐色 (Hae7.5YR4/2)	練粉	練粉	良好	角閃石、長石、赤色粒子	
2	TP4	2層	甕	口縁部	黄褐色 (Hae10YR7/3)	黄褐色 (Hae10YR7/3)	ナデ	ナデ	良好	長石、雲母	肌洗Ⅱ-黒炭系
3	TP5	3層	甕	口縁部	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	ナデ	ナデ	やや甘い	長石、角閃石	肌洗Ⅱ
4	TP6	2層	甕	口縁部	灰色 (HaeN6)	灰色 (HaeN6)	ナデ	ナデ	良好	白色粒	当て具の痕がわずかに残る
5	TP3	2層	窪ね鉢	口縁部	黄灰色 (Hae2.5Y6/1)	暗灰色 (HaeN3)	ナデ	タタキ	良好	赤色粒子	口縁縁部に黒が付着
6	TP5	3層	甕	胴部	にぶい褐色 (Hae5YR7/4)	にぶい褐色 (Hae5YR7/4)	ナデ	ハケ目	良好	長石、雲母	酸化焙焼成
7	TP4	2層	青磁碗	胴部	灰オリーブ色 (Hae5Y5/3)	灰オリーブ色 (Hae5Y5/3)	施釉	施釉	良好	黒色粒	鐵系黒系青磁碗Ⅰ類
8	TP4	2層	青磁碗	胴部	灰オリーブ色 (Hae7.5Y5/2)	灰オリーブ色 (Hae7.5Y5/2)	施釉	施釉	良好	白色粒、黒色粒	鐵系黒系青磁碗Ⅰ類
9	TP6	1層	メソコ	—	黒褐色 (Hae7.5YR3/1)	黒褐色 (Hae7.5YR3/1)	施釉	施釉	良好	長石、白色粒	近世陶器製の破片を使用

II 本調査の成果

1 概要

(1) 本調査の経緯

前述の試掘結果から、県央振興局都市計画課（現在の「道路第二課」）と協議を行い、試掘調査を行った TP1～6 を含む1,700㎡の範囲を本調査による記録保存の必要性があると判断した。後日、これらの試掘結果データを下にした、本調査の費用、人数、人員、掘削深度等の積算や調査区外のブレハブ及び道具置場用地の確認・確保といった、周囲環境の調整などを行った。そして、平成28年6月16日より本調査を開始した。

(2) 調査の方法

調査範囲は、東西が街路予定幅の約20mで、南北へ道路の進行方向を予定しているの で南北方向への縦長の調査区となっており、中央部分に調査区を分断するかのよう に約2m程度の農道がある。そこに世界測地系に基づいた座標を元に20m×20mのグリッドを設定した。グリッド番号はグリッドの北西支点（グリッドの左上）を基準に X と Y それぞれ座標の百の位、十の位の数字を組み合わせて4桁のグリッド番号を付した。しかし、調査区が狭長なことや、反転調査が必要なことから南側から順に任意で1～4区の区番号を設定した。

調査は、調査区の南端の1区と北端の4区から調査に取り掛かり、終わり次第、農道と隣接する調査区内側の2・3区の調査を行った。表土掘削は重機で行ったが、場所によって高さが異なっていたため約20～40cm程度掘削した。それより下の層は基本的に人力で掘削したが、無遺物層である礫面に達してからは、再度重機を搬入し、下層確認を行った。表土掘削時に調査範囲内の東西南北すべての壁際に土層観察用トレンチを設定した。その際、調査区外の東西に水田が広がっていたことから、掘削後の壁面からの浸水を防止するために、用地境から一定の幅を持たせた。

遺構検出に関しては、実測図による作図及びリバーサル・モノクロフィルムカメラとデジタルカメラを使った写真記録を検出・半載・遺物出土・完掘時の各段階で必要に応じて実施した。

出土遺物の取り扱いに関して、遺構に伴うものや原位置を特定できるものなどは出土状況の写真を撮り、座標値を記録した。それ以外のものは各区番号と層位、日付を記載して一括で取り上げた。

(3) 整理作業の概要

調査期間中から遺物の洗浄や重要遺物の抜き出し、遺物の細かい分類やID付与、まとめて出土した遺物の復元や台帳作成といった作業を行っており、平成28年11月末の現場終了時までに上記の復元以外の作業が完了していた。また、平成29年2月より復元作業を再開、同年4月より遺物の実測作業を開始し、同年6月に復元作業が終了。遺物トレースや遺構図・土層図のトレースが11月下旬に終了し、12月より全体のとりまとめを行った。



図版7 2区空撮



図版8 4区空撮



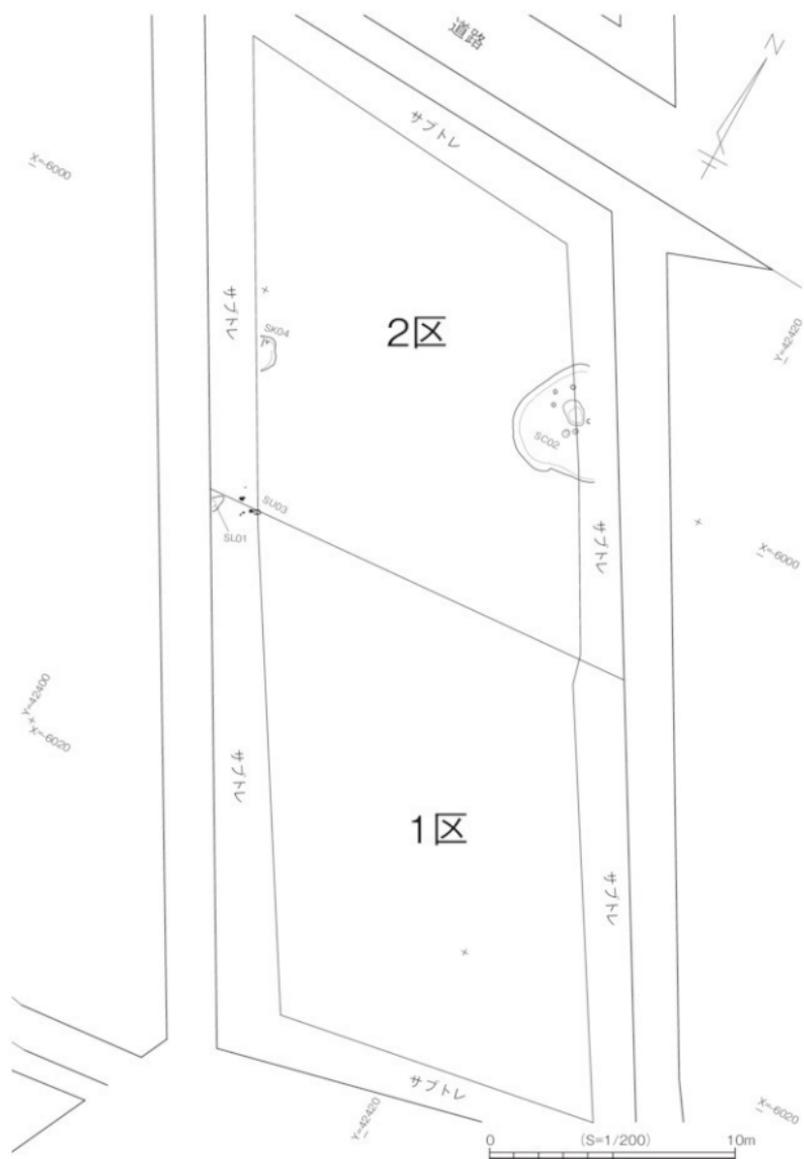
図版9 1区空撮



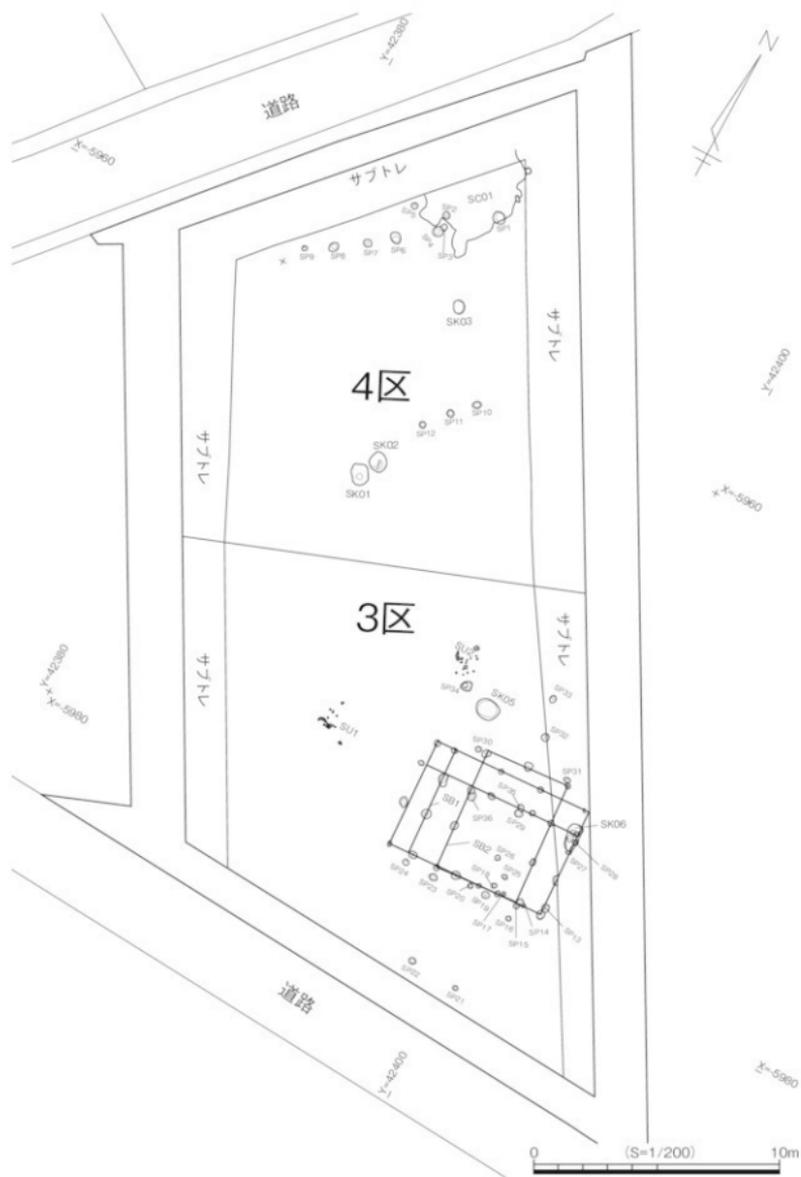
図版10 3区空撮

※図版7・9は第6図に対応

※図版8・10は第7図に対応



第6図 1・2区 遺構配置図 (S=1/200)



第7図 3・4区 遺構配置図 (S=1/200)

2 地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境 (第7図)

大村市は、長崎県本土部のほぼ中央に位置し、西側に佐世保湾を介して針尾瀬戸か早岐瀬戸のみで外界と通じる、非常に閉鎖的な内海である大村湾が広がっている。その沿岸に沿って、北を武留路山・郡岳・遠目山といった多良山系を挟み、東彼杵郡東彼杵町と接する。東側に多良山系の最高峰であり、標高1,000m以上の山では国内最西端に位置する経ヶ岳、他に五屋原岳や多良岳といった標高1,000m級の山に接する。南側は古来より交通の要衝であった鈴田峠が大村市と諫早市を繋ぐ。多良岳を源流に、市内最大級の2級河川である郡川が多良岳系の西側斜面より流れ、大村湾へ注ぐ。その郡川の流れにより形成された東西約2.5km、南北約6kmの広がりを持つ大村扇状地が形成され、現在の大村市の原型となっている。長崎県は他県と比較して平野部の面積が狭く、干拓地を含む県内全域で約13%程度しかなく、大村扇状地は県内でも数少ないまとまった面積を持つ平野部である。立小路遺跡は大村扇状地北側の標高約25m前後の平地に位置し、遺跡より東へ約200m程度離れた位置には郡川が流れている。現在、遺跡周辺の土地は、主に畑や水田として使われている。

(2) 歴史的環境

立小路遺跡の周辺域では縄文時代から現代までの多くの遺跡が確認されてきた。それらの遺跡の長年の調査により、当時の人々の活動範囲や生産活動といった不明な箇所が解き明かされつつある。

立小路遺跡は、今回の発掘調査以前より縄文時代の遺物包含地として知られる。当遺跡の北側に古墳時代の遺物包含地である平野遺跡や弥生時代から古墳時代初頭の川端遺跡がある。川端遺跡は大村市教育委員会の調査で環濠と思われる溝が検出されている。さらに北には、近年、九州新幹線西九州（長崎）ルートの建設や都市計画道路関連の街路改築工事に伴う大規模調査が行われている竹松遺跡がある。その西側には竹松遺跡よりさらに広大な遺跡範囲を持ち、古代の沖田条里跡を含む、黒丸遺跡が広がる。竹松遺跡は平成23年度から長崎県教育委員会によって、10万㎡以上の範囲で発掘調査を行っている。同遺跡からは縄文時代早期後半～前期初め頃と想定される落とし穴跡や弥生時代後期の箱式石棺墓・甕棺墓・土坑墓・祭祀遺構から構成される墓域や同時代の堅穴建物跡が出土している。さらに古墳時代の円墳や中世初めの方形区画溝から成る居館跡などが見つかった。

立小路遺跡から西側に目を向けると、扇状地中央の扇端部付近に弥生時代中期～後期初め頃の長崎県地方最大級の環濠集落遺跡である富の原遺跡が立地する。富の原遺跡からは石棺墓や甕棺墓による墓域や貴重な鉄戈が出土している。大正12年（1923年）に大村海軍航空隊が設置され、その時に行われた飛行場整備工事の影響で元々平坦な地形が一層平坦な地形となって現在に至る。

立小路遺跡より東に約700m程度離れた場所には葛城遺跡が所在する。同遺跡からは縄文時代晩期の埋壘が検出されている。

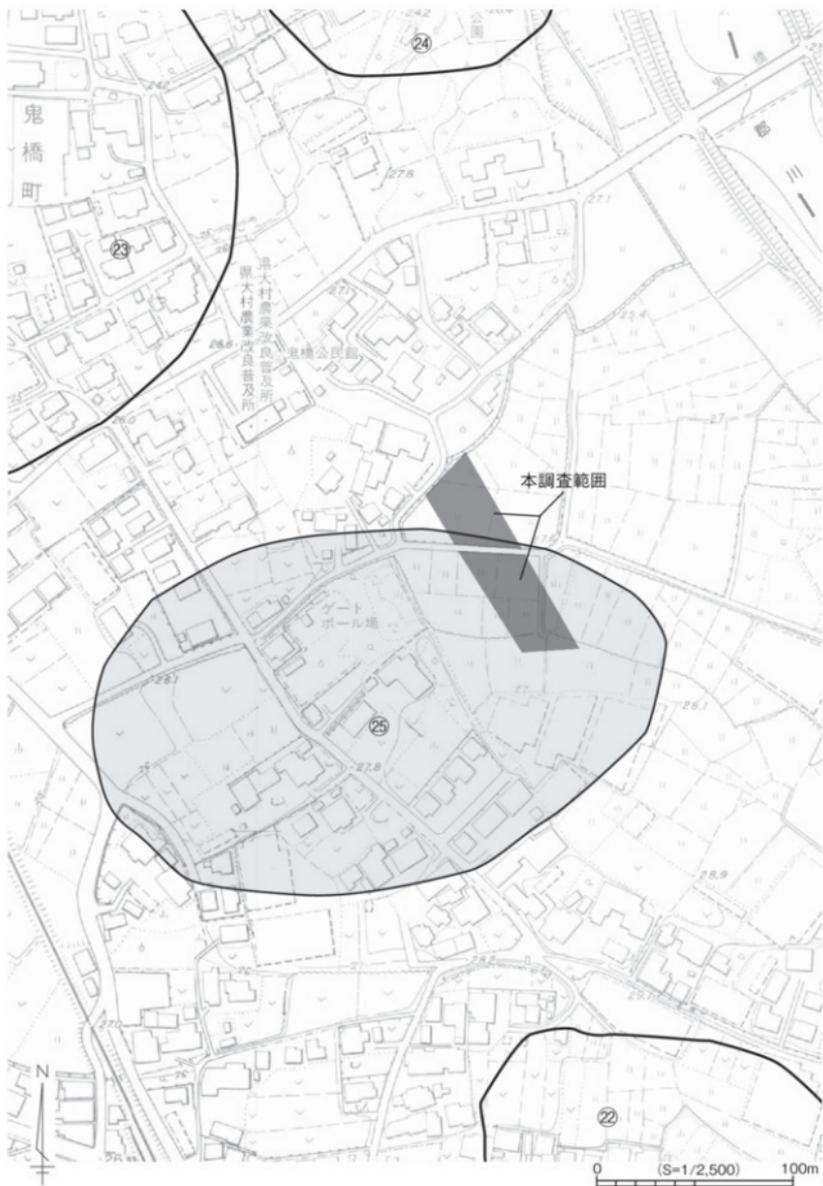
立小路遺跡より南側では小路口遺跡と小路口鬼の穴古墳が立地する。小路口鬼の穴古墳は小路口遺跡範囲内の中央やや南側に位置する両袖複室の横穴式石室である。巨大な石材を使用する構築方法などから6世紀後半～7世紀初頭の築造と推測されている。

このように立小路遺跡周辺は、大村扇状地が広がる郡川中下流域において縄文時代から現代に至るまで人々の盛んな活動痕跡を数多く残す地域である。



- | | | | |
|----------|-----------|---------|------------|
| ①今富城跡 | ⑩黒丸遺跡 | ⑰地堂古墳 | ⑳立小路遺跡 |
| ②野田の久保遺跡 | ⑪竹松遺跡 | ⑱岩名遺跡 | ㉑寿古遺跡 |
| ③野田古墳 | ⑫富の原遺跡 | ㉒沖田黒丸条里 | ㉒石走古墳群 1号墳 |
| ④野田A遺跡 | ⑬冷泉遺跡 | ㉓大上戸川条里 | ㉓石走古墳群 2号墳 |
| ⑤葛城遺跡 | ⑭榊田遺跡 | ㉔好武城跡 | ㉔石走遺跡 |
| ⑥玖島城跡 | ⑮野岳遺跡 | ㉕小路口遺跡 | ㉕山の上石棺 |
| ⑦大村館 | ⑯黄金山古墳 | ㉖平野遺跡 | ㉖八竜古墳 |
| ⑧三城城跡 | ⑰小路口鬼の穴古墳 | ㉗川端遺跡 | ㉗懸場石棺 |

第8図 周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)



第9図 周辺遺跡分布図 (S=1 2,500)

※道路番号は第10図凡例参照のこと

3 調査組織

本調査は長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所が担当し、作業員の労務管理および地形測量・遺構実測を株式会社大信技術開発・扇精光コンサルタンツ株式会社に委託した。調査組織は以下のとおりである。

新幹線文化財調査事務所	所長	古門 雅高 (平成26年度～)
	課長	杉原 敦史 (平成26年度～)
		田尻 清秀 (平成24年度～平成27年度)
		小島 克孝 (平成28年度～)
	係長	村川 逸朗 (平成24年度～平成27年度)
主任主事	浜口 広史 (平成25年度～平成28年度)	
	主事	水口 真理子 (平成28年度～)
範囲確認調査担当	主任文化財保護主事	中尾 篤志
	文化財保護主事	本田 秀樹
本調査担当	主任文化財保護主事	川畑 敏則
	文化財調査員	小松 義博
株式会社大信技術開発・扇精光コンサルタンツ株式会社共同事業体		
	現場代理人	中島 健太郎
	主任調査員	竹田 将仁
	調査員	織田 健吾
整理・報告書作業担当	文化財調査員	小松 義博

4 日誌抄録 (発掘調査)

・平成28年6月16日：準備工開始。

6月30日：表土剥ぎ、トレンチ掘削開始。1・4区を対象に試掘調査時の2層まで掘削。
2・3区に関しては、廃土置き場として利用するため後半に調査を行う。

7月1日：開所式、調査開始。

7月25日：4区3層中にて、ビットを12基検出。中世の単独のものと判断した。

7月26日：4区南側の部分的に微高地になっている箇所（4層～5層直上）で縄文土器片が集中して出土。廃棄土坑の可能性を考え、それぞれSK01、SK01を付与する。

8月2日：SK01、SK02の遺物の出土状況から、埋裏である可能性が高くなり、以降は埋裏を想定して調査を進める。

8月8日：4区最北端の4層中にて堅穴建物（SC01）を検出。北部分を排水用トレンチに削平されていたが、残存する部分の中央～南側と想定される部分に十字のベルトを設定し、掘削を行った。

8月23日：1区と4区を中心に第1回目の空中撮影を実施。

- ・平成28年8月29日：1区の完掘検査を実施し、その後埋め戻し開始。
- 9月6日：2区の表土剥ぎ、開始。
- 9月9日：2区の表土剥ぎ完了。3層（古代～中世）の掘削開始。
- 9月14日：4区の完了検査を実施し、その後埋め戻し開始。
- 9月20日：2区の3層掘削完了。4層（縄文晩期～弥生）の掘削を開始し、黒褐色の不
明瞭なプラン（後のSC02）を検出、サブトレンチを設定。3区の表土剥ぎ、
トレンチ掘削開始。
- 9月26日：3区の表土剥ぎ、トレンチ掘削完了。3層の精査、掘削開始。
- 9月29日：2区西壁付近の3層中にて、中世と考えられる炭化物・焼土塊を含む土坑（SK
04）を検出。壁際にサブトレンチを設定し、プラン確定。記録・掘削した。
- 10月11日：3区東側の3層～4層直上にて、掘立柱建物（SB01、02）を2基検出。SB01
は2間×3間の母屋部分に庇が北と西側に付く形となる。SB02も同じく2間
×3間だが、庇が付かない側柱建物となる。建物の軸が一部、重なることから、
前後関係が考えられる。
- 10月12日：3区4層中にて、遺物集積箇所（SU01）を検出。実測とドット上げを行った。
- 10月18日：3区南壁際の4層中にて、焼土片・炭化物を含む、土坑（SK06）を検出。
同じく、3区4層中にて、遺物集積箇所（SU02）を検出。
- 10月31日：2区南西の壁際、4層中にて、遺物集積箇所（SU3）を検出。
- 11月11日：2区と3区をメインに第3回目の空中撮影を実施。
- 11月21日：閉所式後に、3区の完掘検査を行った。
- 11月29日：2・3区の埋め戻し完了検査を実施、撤収。



図版11 1・2区トレンチ掘削状況（北から）



図版12 4区SK1、2検出状況（南から）



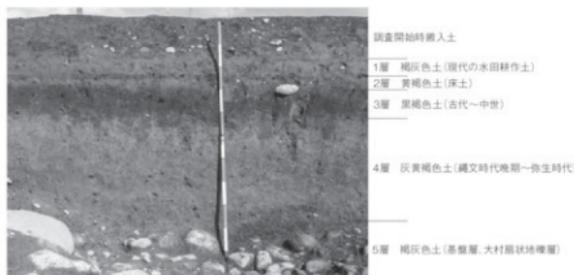
図版13 3区SB01完掘状況（北から）



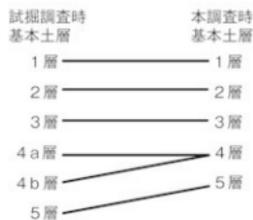
図版14 2区5層礫層掘り下げ（北西から）

5 基本土層

1層は褐灰色土の耕作土である。2層は明黄褐色土の床土であり、1・2層は現代の水田耕作土である。3層は黒褐色土の炭化物片及び焼土粒を多量に含む土で、須恵器や朝鮮系青白磁、石鋼の破片が多く出土するので、古代～中世の包含層と想定される。4層は灰黄褐色土で全体的に厚く堆積しており、場所によっては1mを越えるところもある。上層は粘性がかなり強く、下層になるほど粘性が無くなり、砂が増えてくる。縄文時代晩期～弥生時代の遺物が多く、特に縄文時代晩期の土器片がその大半を占める。ただ、4層内の遺物の出土層位は縄文時代晩期も弥生時代の遺物も偏りは無く、かなり混在している。遺構は4層下層から弥生時代中期末の須玖Ⅱ式の土器を伴う竪穴建物が検出されている。他にも、標高値から考えると3層相当だが、地形がかなり隆起していて、土層堆積上では4層にあたる箇所最下層から縄文時代晩期の深鉢を使用した埋堦が出土している。遺物が混在していることや遺構の検出状況から、4層堆積時は平坦な地形ではなく、部分的に隆起したり窪地状になったりした谷地形の土地であったことが考えられる。5層は拳大～人頭大の礫を含む褐灰色土の層で、いわゆる大村扇状地の基盤層である。遺物は出土していない。



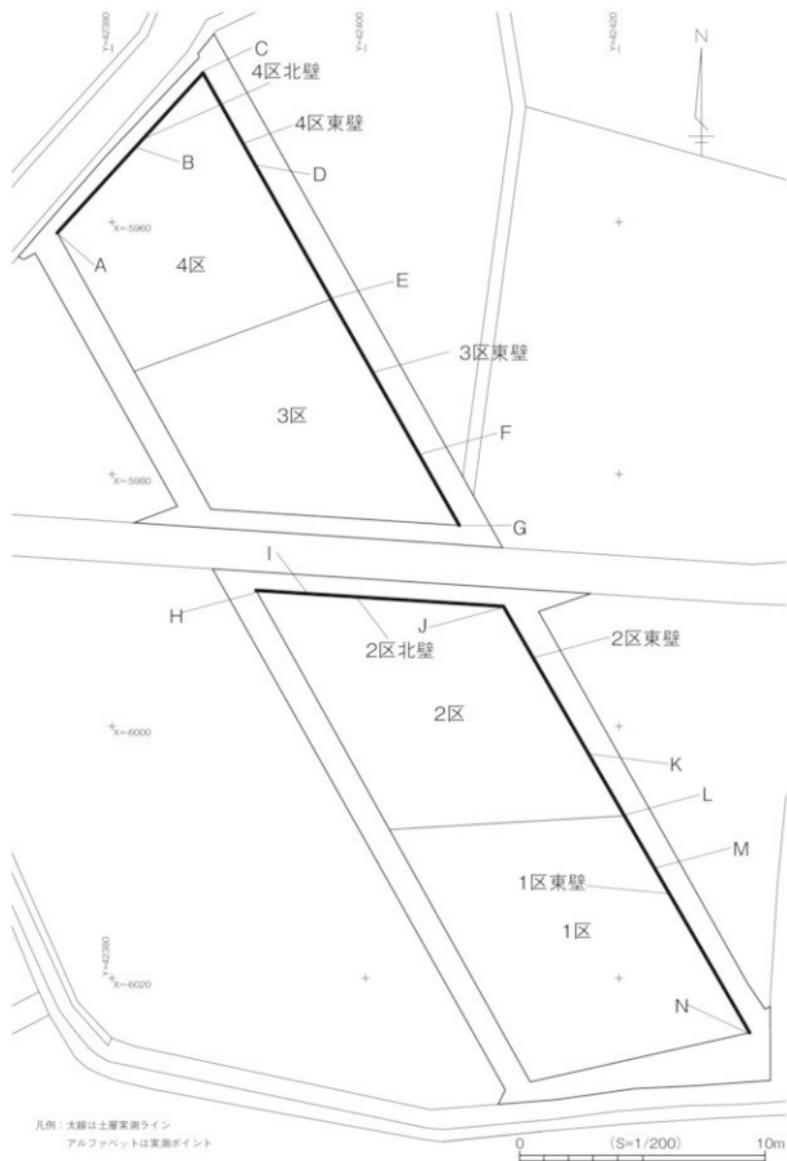
図版15 基本土層 (2区北壁)



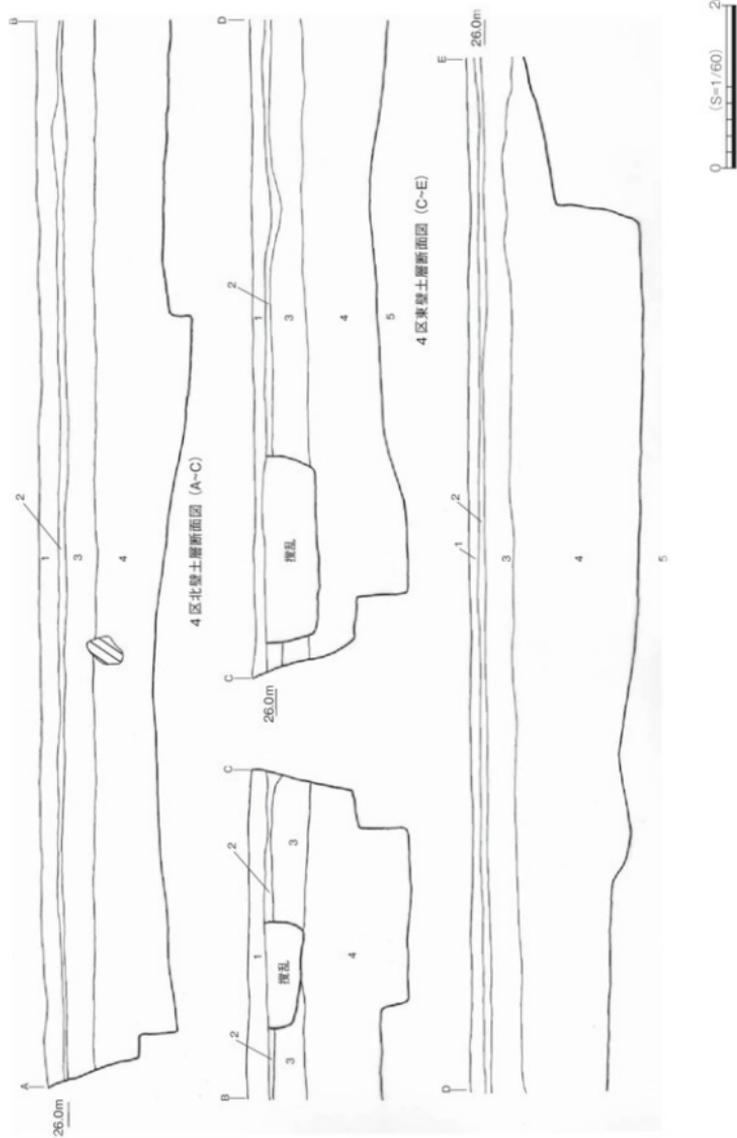
第10図 試掘・本調査における基本土層対応図



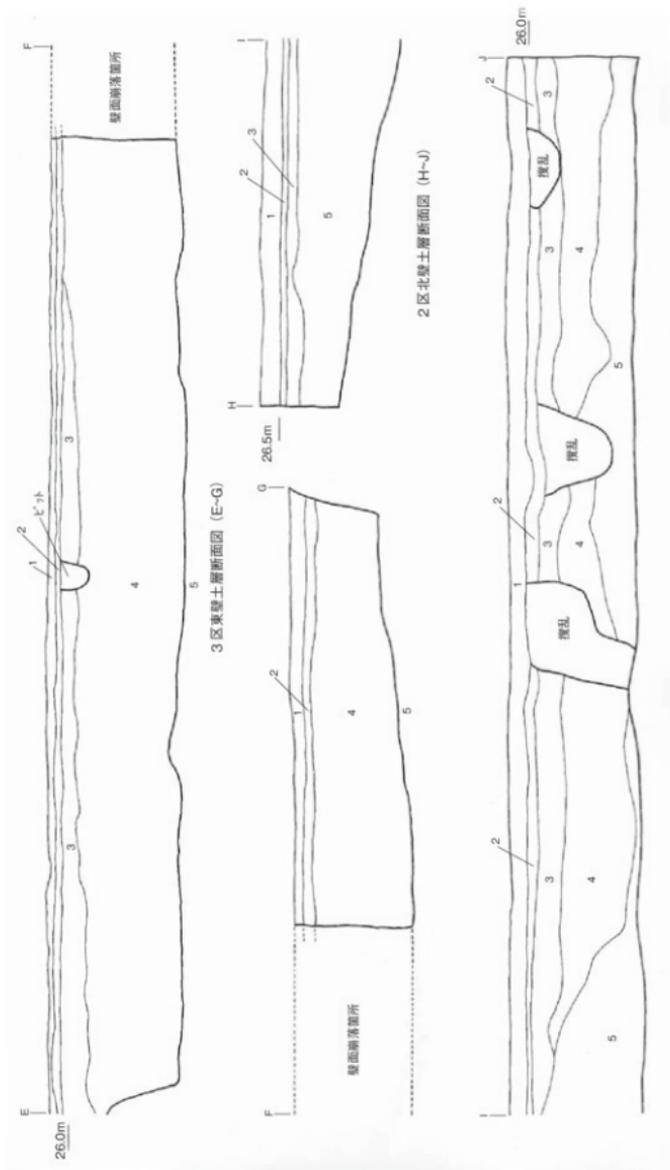
図版16 4区東壁土層堆積状況(南西から)



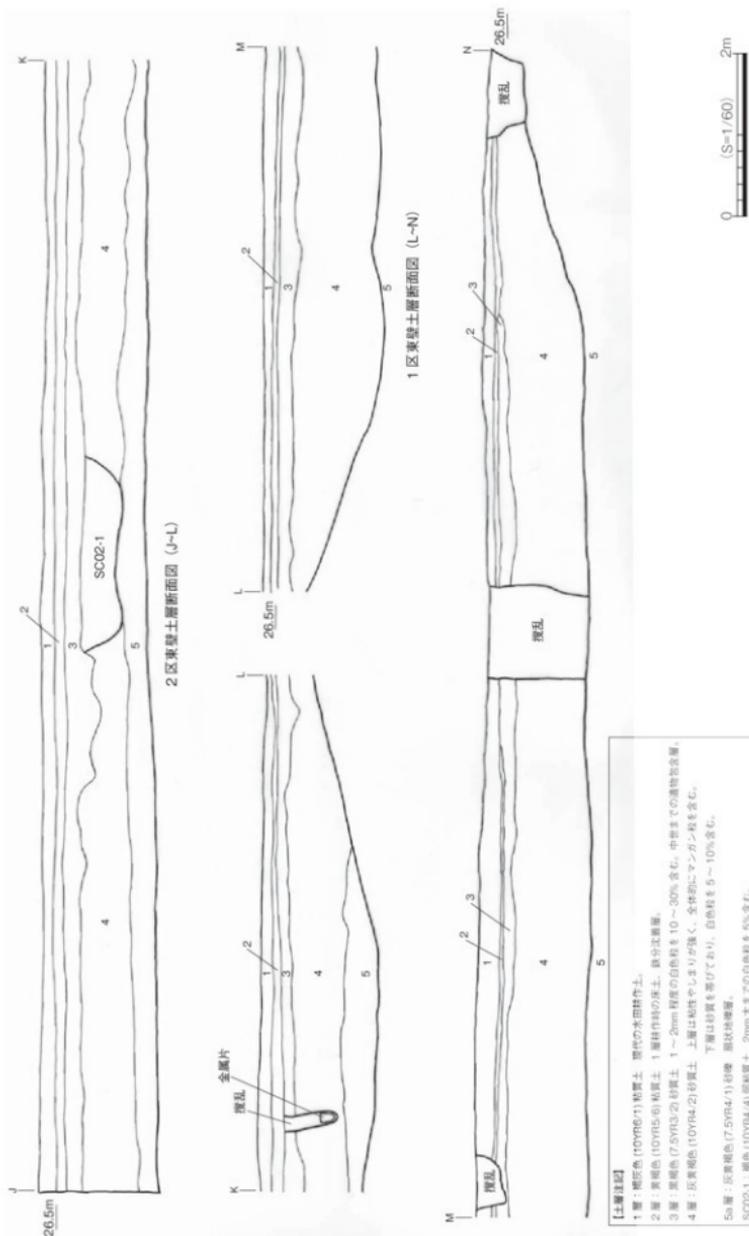
第11図 土層図対応図 (S=1/200)



第12図 調査区内土層実測図① (S=1/60)



第13図 調査区内土層実測図② (S=1/60)



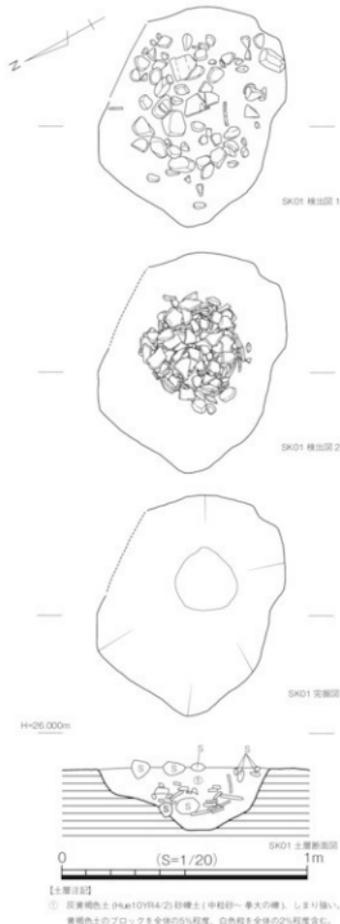
第14図 調査区内土層断面図③ (S=1/60)

6 遺構及び遺構内出土遺物

4区9638グリットにて、埋甕2基（SK01、SK02）を検出した。この2基の埋甕は1mも離れていない場所に隣接する形で埋設されており、SK02は上下の甕とそれを囲う形で拳大～人頭大の礫が配置されていた。SK01に関しては、一部、胴部の破片が甕の形を描くように円形状に直立して出土し、残りの破片もそのほとんどが円の内側に収まる形で出土した。接合の段階で2個体分の破片であることが判明した。

(1) 埋甕 (SK)

SK01 前述のように4区の4層下層から5層中に掘り込んだ径約70cm、深さ約30cmの土坑内から検出した。検出面では、5～10cm程度の多量の礫と30点ほどの破片が混ざり合う形で出土しており、この時点で胴部と想定される破片は弧を描くように直立していた。それら以外の破片は、内側に積み重なって出土した。破片の取り上げ点数は303点で、検出当初は多量の破片から廃棄土坑と考え調査を進めていたが、胴部片が円形に直立して残っていたことやほぼ同じ高さで隣接して検出したSK02の存在などから、埋甕であることを想定した調査方法に変更した。具体的には、SK01とSK02のプランの北側半分とプラン周辺を広くに断ち割り、断面で観察できる状態にした。土坑内の埋土は、直立する胴部の内外ともに違いが見受けられず、甕を構成する破片以外の遺物は含まれていない。なお、土器片からは2個体分の甕が復元されている。どちらが上甕、下甕なのかは判然としない。1・2は縄文時代晩期の粗製深鉢である。1は口縁部～胴部で、口径43.0cmを測る。調整は内外面ともに貝殻条痕、その後にはナデ調整を施す。2は、口縁部～底部付近で、口径38.6cmを測る。調整は内外面ともに貝殻条痕を施すが、内面はさらにナデしている。器形は砲弾型を呈する。土坑内で1とともに細かく割れた状態で検出されている。底部は確認されていない。



第15図 SK01 実測図 (S=1/20)



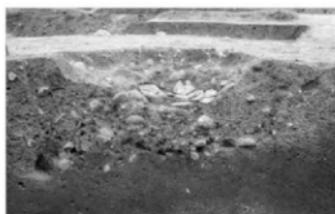
図版17 SK01検出状況



図版18 SK01際撤去時



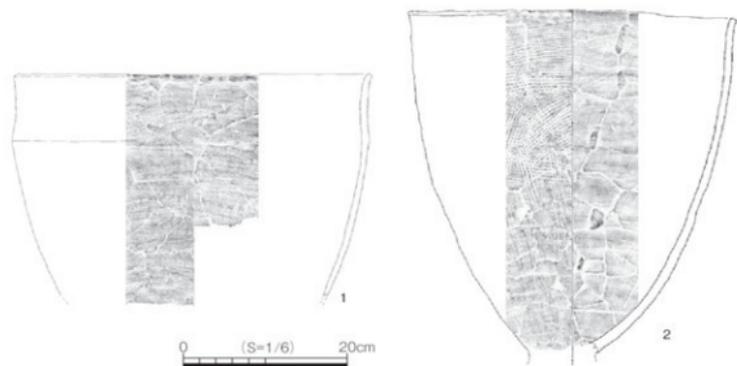
図版19 SK01遺物出土状況



図版20 SK01掘り方断面



図版21 SK01完掘状況



第16図 SK01 出土土器実測図 (S=1/6)

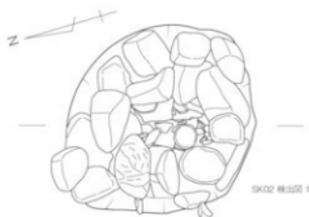


図版22 SK01出土土器

表3 SK01出土遺物観察表

採取 番号	出土地区	層位	器種	部位	法量 (cm)			色調		調整		焼成	胎土	備考
					口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
1	4区	4層	深鉢	口縁部～胴部	43.4	(28.1)	—	浅黄褐色(Hue)0YR8-4)	にぶい黄褐色(0YR7.3)	条痕→ナデ	条痕→ナデ	良好	雲母、長石	1/3程度残存
2	4区	4層	深鉢	口縁部～底部付近	38.6	(44.3)	—	黄灰色(Hue)0YR4-1)	灰黄褐色(Hue)0YR5-2)	条痕→ナデ	貝殻条痕	良好	石英、雲母、長石	底部欠損

SK02 SK01と同じく4区の4層下層、ほぼ同じ標高から検出した。土坑の径は約75cm、深さは約60cmで、検出時は礫の一部と上甕の底部がわずかに見えていた。礫周辺の土を取り払うと、上甕の底部の横に別の甕の底部が出土し、それらを取り囲むように10～20cm程度の人頭大の礫が覆いかぶさっていた。掘り進めていくうちに判明したが、石囲いの外側を構成する礫は直立する形で検出しており、意識して礫を並べた可能性がある。さらに、接合段階で上甕底部と並んで出土したもう1つの底部は、下甕の底部を抜いたものだと分かった。中央部の礫を取り外して下甕の存在を確認した後に、前述したSK01と同様の断ち割りを行った。下甕を取り上げる段階で、掘り方と下甕の口縁部～底部付近の間に人頭大の礫が多数見つかっており、上部の囲いと同様に、甕の外側を一回りする形で配置してあることなどから、甕の位置を調整して配置するための支えだったのではないと思われる。上下の甕の内部や掘り方の覆土からも甕以外の遺物は見つかっていない。1・2は縄文時代晩期の粗製深鉢である。1は口径45.8cm、底径10.2cm、器高43.0cmを測る。調整は内外面ともに貝殻条痕を施す。器形は平底の底部からくの字状に屈曲して上方へ開くように立ち上がるが、胴部上方のキザミ目を有する粘土帯付近から緩やかにくびれて口縁部はやや外反する。口縁部直下に2条の補修孔を施す。底部は意図的に打ち欠かれており、打ち欠いた底部は2の上に重なった状態で出土した。2は口径33.6cm、底径8.8cm、器高30.0cmを測る。調整は内外面ともに貝殻条痕を施す。器径は平底の底部からくの字上に屈曲して内湾気味に開くように立ち上がる。口縁部は平坦ではなく、かなり歪みがある。1の上甕として出土した。



SK02 検出図 1

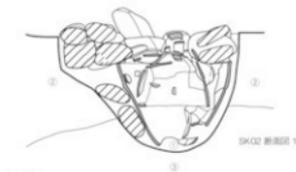


SK02 検出図 2



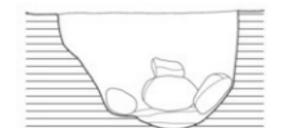
SK02 検出図 3

H=26.0m



SK02 断面図 1

H=26.0m



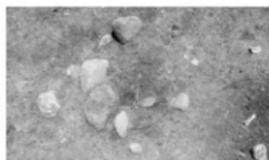
SK02 断面図 2

0 (S=1/20) 1m

第17図 SK02実測図 (S=1/20)

【土層注記】

- ① 灰黄褐色土 (Hae10YR4-2) 砂質土 (細粒砂～2mm程度の礫)、ややしまり強い、白色や黄褐色の粒子を全体に含む。小礫は上半部に集中することから、②の影響を受けられた可能性が高い。
- ② 黄褐色 (Hae10YR5-1) 砂礫層 (細粒砂～5cm程度の礫)、しまり強い。4層に相当するが、調査区最部の土層に取れないため、部分礫層と考える。
- ③ 濃い黄褐色 (Hae10YR5-4) 砂質土 (細粒砂)、中程度のしまり、5層相当。



図版23 SK02検出状況



図版24 SK02礫囲い検出状況



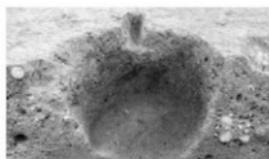
図版25 中央部礫撤去及び下礫検出状況



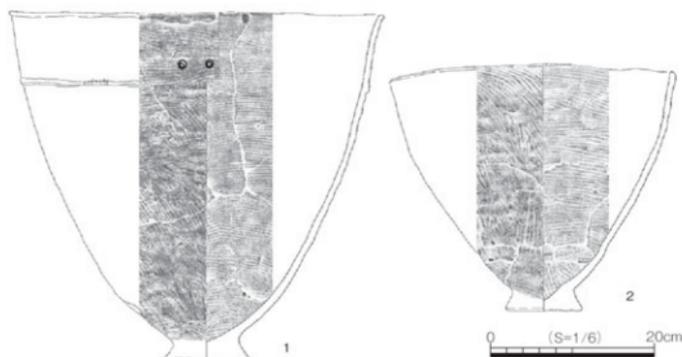
図版26 SK02掘り方断面



図版27 SK02裏込め検出状況



図版28 SK02完掘状況



第18図 SK02出土土器実測図 (S=1/6) (1:下甕、2:上甕)



図版29 SK02出土土器

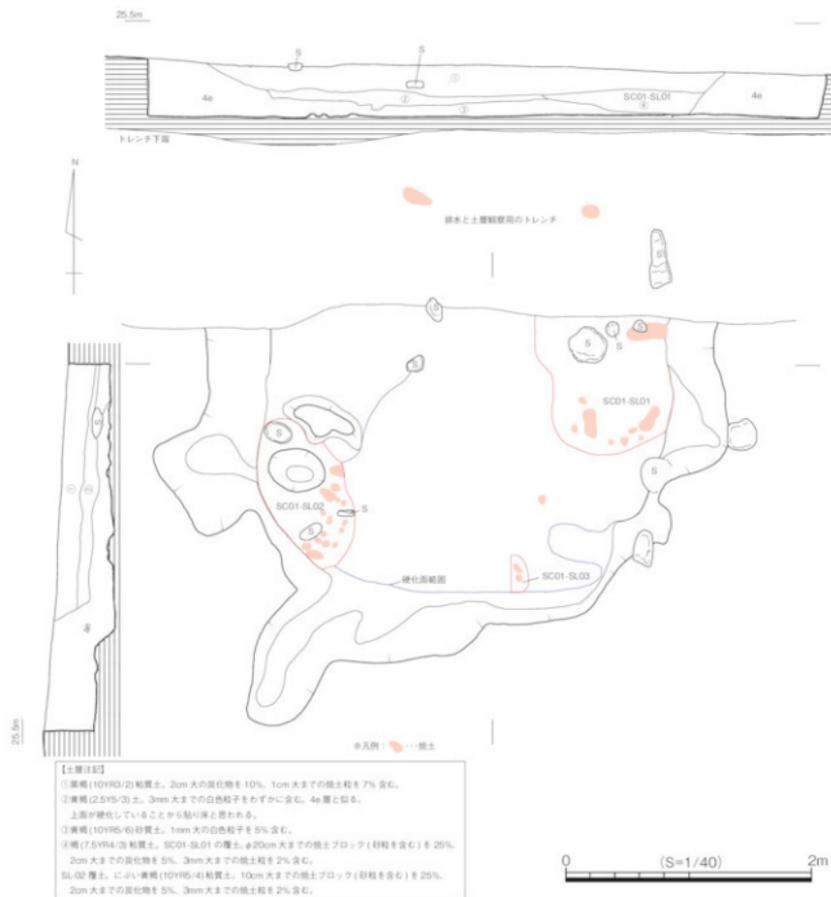
表4 SK02出土遺物観察表

図版 番号	出土地区	層位	器種	部位	法量 (cm)			色調		調整		地成	胎土	備考
					口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
1	4区	4層	深鉢	完形品	45.2	43.0	10.2	にぶ-黄褐色 (10YR7/4)	灰黄褐色 (10YR5/2)	貝殻条痕	貝殻条痕	良好	石英、雲母、長石	補修工あり、下甕
2	4区	4層	深鉢	完形品	33.6	28.2-30.0	8.8	褐色 (10m7.5YR7/6)	灰黄褐色 (10YR5/2)	貝殻条痕	貝殻条痕	良好	石英、雲母、長石	上甕

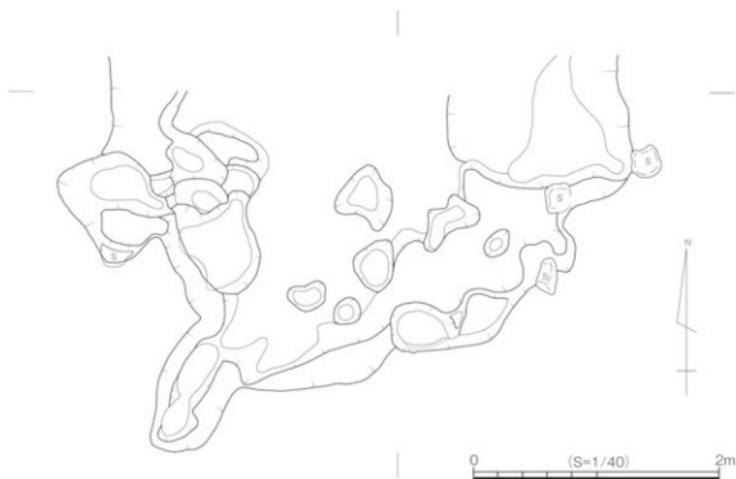
(2) 竪穴建物跡 (SC)

SC01 第4区4層中より検出した。調査開始時より、調査区北側の土層確認用トレンチにて立ち上がりを確認していたが、平面上では明瞭なプランは捉えられず、炭化物が混じる染み状の広がりとして確認していた。そのため、T字状にトレンチを設定し、立ち上がりから平面のプランを確定した。プランの北側は土層確認用トレンチで削平されており、残存状況からの最大径は4.5m程度で歪な形状をしている。床面は広い範囲で貼り床を確認しており、かなり硬化している。炉跡は検出されなかった。遺構内の壁際には不定形な落ち込みが3箇所あり、落ち込みの内外に焼土の広がりを確認した。さらに落ち込みの覆土からは砂混じりの焼土塊が出土している。前述の状況から、この竪穴建物跡は

住居の可能性は低く、むしろ火を使って作業を行うための場所ではないかと考えられる。なお、建物内の覆土からは、弥生時代中期～後期の土器片が出土しており、その時期の堅穴建物の可能性が高い。床面からの遺物の出土はなかった。1は弥生時代中期末の甕の底部である。復元底径7.0cmを測る。調整は内面がナデ、外面は縦方向のハケ目を施す。底部は平底であり、外面には直径1cmほどの焼成後に削られた凹みが残る。長崎県彦岐市に所在する原の辻遺跡の弥生土器・古式土器器編年案（宮崎編年）における須玖Ⅱ式の弥生中期Ⅴ期（中期末）に相当する。2は弥生時代後期の台付甕の底部である。調整は内外面ともにナデ。底部は上げ底になっている。



第19図 SC01実測図（床面検出時）（S=1/40）



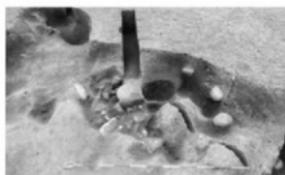
第20図 SC01実測図（掘り方検出時）（S=1/40）



図版30 SC01検出状況



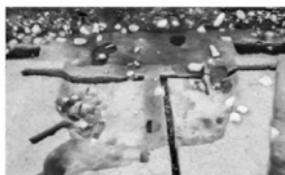
図版31 SC01-SL01焼土検出状況



図版32 SC01-SL02焼土検出状況



図版33 SC01-SL02焼土検出状況（近景）



図版34 SC01硬化面（床面）検出状況



図版35 SC01掘り方完掘状況



第21図 SC01出土土器実測図 (S=1/3)



図版36 SC01出土土器

表5 SC01出土遺物観察表

図版 番号	出土地区	層位	器種	部位	色調		調整		焼成	胎土	備考
					外面	内面	外面	内面			
1	4区	4層	甕	底部	に濃い褐色 (Hae10YR7.3)	に濃い褐色 (Hae10YR7.3)	ハケ目	ナデ	やや甘い	石英、長石、雲母	須玖Ⅱ式
2	4区	4層	甕	底部	褐色 (Hae5YR7.6)	灰白色 (Hae7.5YR8.2)	ナデ	ナデ	良好	角閃石、雲母、砂粒	底部1/4底

SC02 第2調査区の4層中にて検出した。SC01と同じく、平面状のプランは染み状のかなり不明瞭なものであったため、調査区東側壁際の土層確認用トレンチ壁面に立ち上がりを確認した。平面状のプランを確定するために、染み状の検出面のおおよその範囲から範囲外まで伸びるトレンチを設定し、断面で立ち上がりを確認した。プランの東側、全体の約半分程度が土層確認用トレンチと調査区外のため全形は出せなかったが、残存状況から南北方向に約4.6m、東西方向に2.7m、深度0.2mを確認した。掘り込みは5層砂礫層上面まで達しており、床面は貼り床でほぼ平坦になっているが、著しく硬化している面は見られない。また、プランの中央部と思われる位置に長径0.5m、短径0.4m、深さ0.2mほどの浅い土坑を検出した。この土坑には焼土や炭化物などは極少量しか含まれていなかったが、覆土が2層に分層できて、2層目は被熱を受けたような黄色味がかった土が土坑の底に溜まるように堆積しており、位置関係的にも竪穴建物の想定プランの中央あたりになることから、炉として利用されていたのではないかと推測される。その他に、中央の土坑を取り囲む形で柱穴が6基検出しているが、床面検出時には1基しか検出できず、掘り方の確認の際に残り5基を検出した。柱穴の径が約0.15~0.3m、深さが約0.1~0.2m程度とほとんどが小型で浅く、弱い印象を受ける。ただ、竪穴建物として実際に使われていた期間は、土坑や貼り床の状況から短期間だったと思われる。柱穴の様相が使用期間に関わっている可能性もありうる。床面から出土した遺物はなかった。覆土からは出土した遺物は、弥生時代中期頃が大半を占めており、遺構の年代はSC01と近いと思われる。1は縄文時代晩期の粗製深鉢の口縁部である。調整は内外面ともに貝殻条痕を施しており、外面はさらにナデ調整を施す。2~4は甕の口縁部である。2は鋤先型の口縁部を呈する、須玖Ⅱ式土器である。4は断面三角状の口縁部を呈しており、3・4は在地のものではあるものの、黒髪式の系譜に連なると考えられる。5は弥生時代中期後葉の壺の胴部である。調整は内外面ともにナデ調整。断面M字形の突帯を呈する。6・7は甕の底部である。6は復元底径8.0cmを測る。調整は内面がナデ調整と指オサエの跡が残り、外面はハケ目と丹塗りを施し、底部は平底を成す。7は外面にうすすらとハケ目がみられるが、内外面ともにかなり摩耗していて調整はほとんど確認できない。なお2~7は原の辻遺跡の弥生土器・古式土器器編年案における須玖Ⅱ式古段階の弥生中期Ⅳ期(中期後葉)のものと思われる。



図版37 SC02検出状況



図版38 SC02土層堆積状況



図版39 SC02土坑プラン検出状況



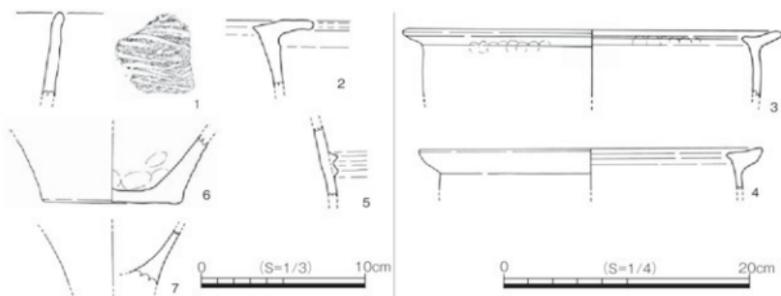
図版40 SC02完掘状況



第22図 SC02実測図(床面検出時)(S=1/40)



第23図 SC02実測図(掘り方検出時) (S=1/40)



第24図 SC02出土土器実測図 (S=1/3)



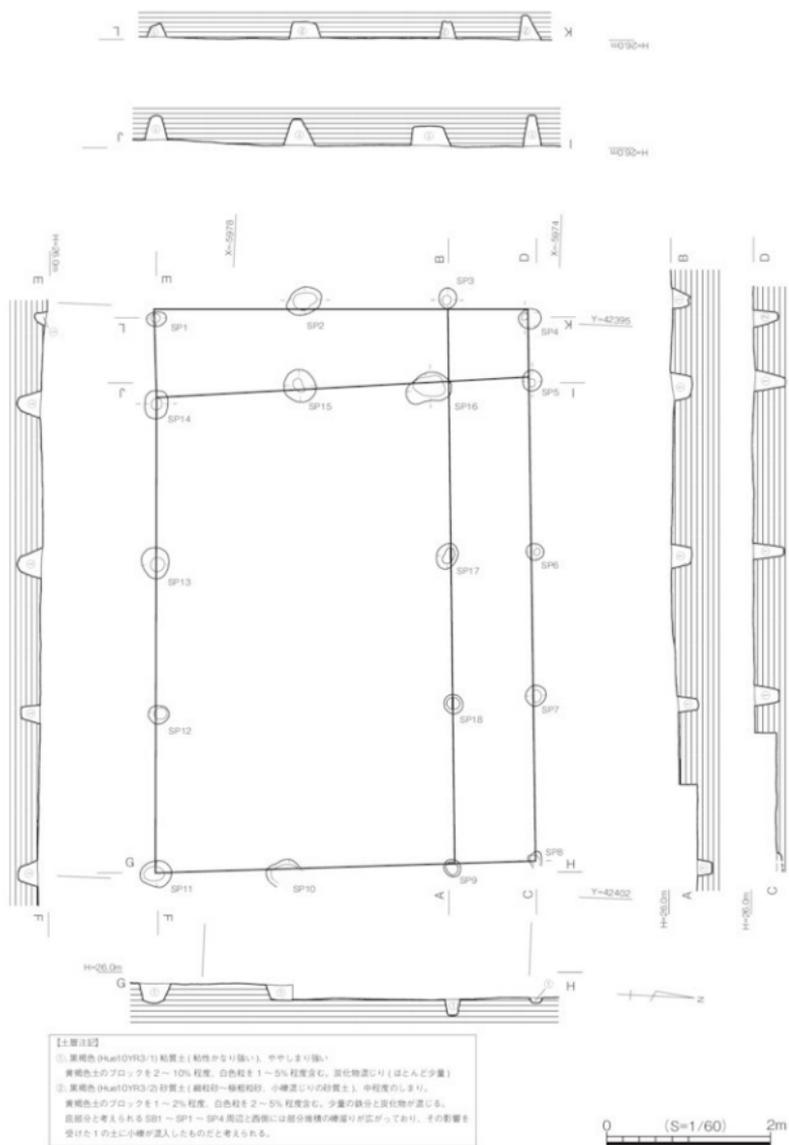
図版41 SC02出土土器

表6 SC02出土遺物観察表

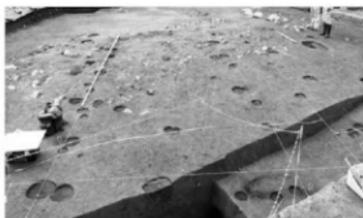
図版番号	出土地区	層位	器種	部位	色調		調整		構成	胎土	備考
					外面	内面	外面	内面			
1	2区	4層	深鉢	口縁部	橙色 (Hae7.5YR7/6)	橙色 (Hae7.5YR7/6)	赤黒→ナデ	赤黒→ナデ	良好	長石、石英	
2	2区	4層	美	口縁部	橙色 (Hae7.5YR7/6)	にぶい黄橙色 (Hae10YR7/4)	ナデ	ナデ	良好	石英、長石	須玖式
3	2区	4層	美	口縁部	にぶい黄橙色 (Hae10YR7/3)	にぶい黄橙色 (Hae10YR7/4)	ナデ	ナデ	良好	角閃石、石英	黒瓦式 (在池)
4	2区	4層	美	口縁部	浅黄橙色 (Hae10YR8/3)	浅黄橙色 (Hae10YR8/3)	ナデ	ナデ	やや甘い	角閃石、石英	黒瓦式 (在池)
5	2区	4層	壺	胴部	にぶい橙色 (Hae7.5YR7/4)	褐灰色 (Hae7.5YR4/1)	ナデ	ナデ	良好	角閃石、雲母、砂粒	断面M字型突起
6	2区	4層	美	底部	橙色 (Hae2.5YR6/6)	灰黄色 (Hae2.5Y7/2)	ハケ目	ナデ、指ナデ	やや甘い	石英、長石、雲母	須玖式、丹塗り
7	2区	4層	美	底部	にぶい橙色 (Hae7.5YR7/4)	灰黄褐色 (Hae10YR7/2)	ハケ目		良好	石英、雲母	須玖式、丹塗

(3) 掘立柱建物跡

SB01 第2調査区の3層面において検出。梁行2間、桁行3間の母屋に北と西に庇が付く。梁の柱間の心間距離は約1.7~2.0mで桁の柱間の心間距離は約1.8~2.1mである。柱穴の径は約0.25~0.55m、深さは約0.07~0.38mとなるが、東側で検出された柱穴は調査区壁際のトレンチ掘削時に確認したもので、本来の標高で捉え切れなかった可能性が高く、実際の深さは+0.15~0.20mになると考えられ、その場合は約0.25~0.38mとなり深度の幅は小さくなる。覆土は黒褐色の粘性がかなり強いものと小礫混じりの砂質土の2パターンがあり、どちらも少量の炭化物を含み、小礫混じりのほうは鉄分も含む。9割は粘性が強い土だが、西側の底部分の柱穴3基は小礫混じりの土である。2区は中央部の5層砂礫層の標高が高く、東西がかなり低い山なりの地形をしており、底部分の小礫混じりの覆土はそれらの影響を受けたものだと考えられる。SB01-SPI0からは12世紀前半代の白磁皿片が出土している。後述に記載するSB02と重なる位置で検出しており、中心軸は90度ずれてはいるが、南辺が重なる。さらにSB02の柱穴もSB01の柱穴とほぼ同じ覆土であり、SB02の柱穴からも12世紀代の遺物が出土していることなどから、一方の建物の廃棄後、間を置かずにもう一方が建てられた可能性が高い。なお、出土した白磁皿(1)は大宰府条坊跡XVの編年における白磁皿のVI類と思われる。時期は11世紀後半~12世紀前半。



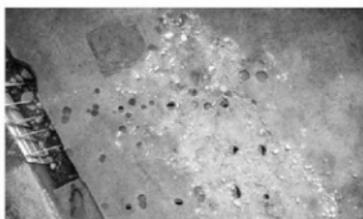
第25図 SB01実測図 (S=1/60)



図版42 SB01検出状況（東から）



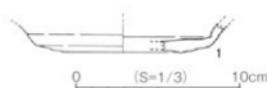
図版43 SB01完掘状況（北から）



図版44 SB01・02空中撮影



図版45 SB01-SP17土層断面



第26図 SB01-SP10出土遺物実測図

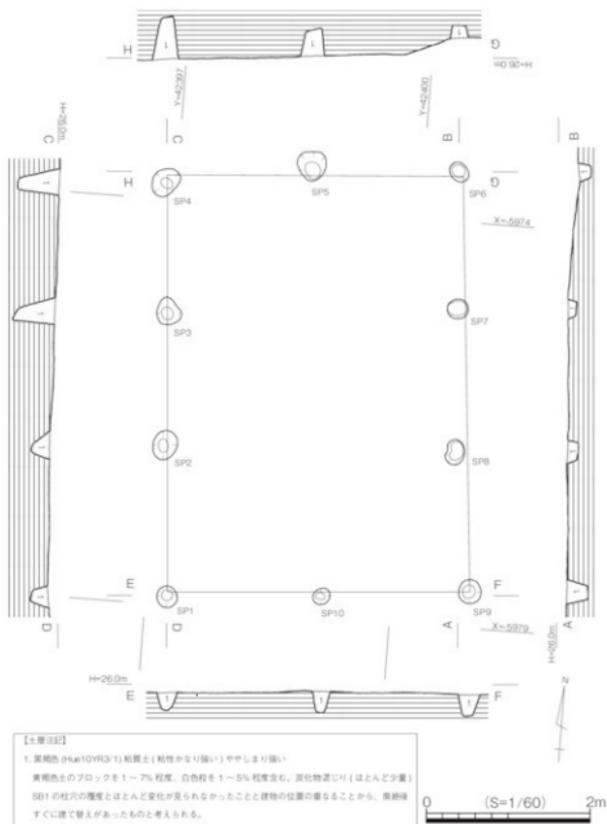


図版46 SB01-SP10出土遺物

表7 SB01出土遺物観察表

図版 番号	出土地区	層位	器種	部位	色調		調整		焼成	胎土	備考
					外面	内面	外面	内面			
1	3区	3層	青磁皿	底部	灰白色 (Hue7.5Y7/2)	灰白色 (Hue7.5Y7/2)	施釉	施釉	良好	長石	同安南系青磁皿1類

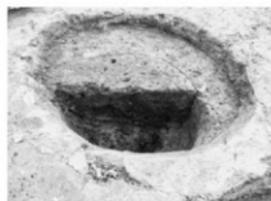
SB02 第2調査区の3層面にて検出。梁行2間、桁行3間の側柱建物と考えられる。梁の柱間の心間距離は1.8~1.9mで桁の柱間の心間距離は1.6~1.9mである。柱穴の径は約0.20~0.35m、深さは約0.16~0.50mとなるが、SB01同様に東側のトレンチから検出されたピットも含むため、深さは+0.05~0.10mの約0.21~0.50m程度と思われる。柱穴内で出土した遺物は少量で図化に耐えるものも少なかったため、時期の判定に役立ちそうな2点(SB02-SP05、SB02-SP08出土)を掲載した。1・2は滑石製の石鍋である。1は口縁部である。内面口縁部直下に稜を持つ。鈎付型で12世紀代の所産と思われる。2は胴部で、うすすらと縦方向の削り痕が残る。上下の破断面に研磨痕が見られる二次加工品である。



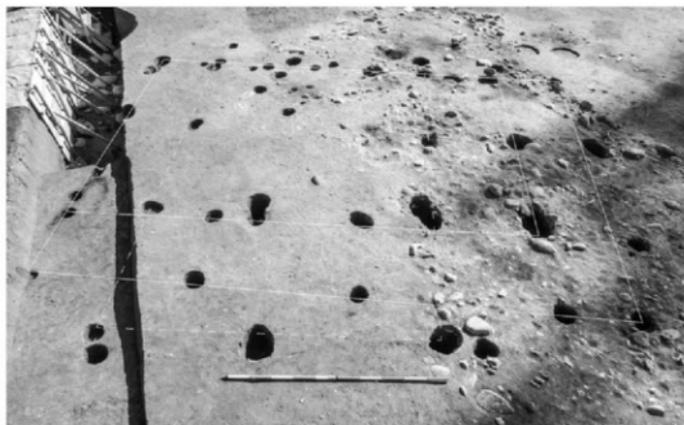
第27図 SB02実測図 (S=1/60)



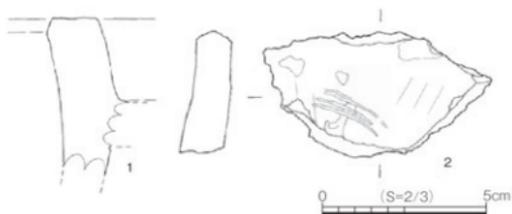
図版47 SB02完掘状況



図版48 SB02-SP05土層断面



図版49 SB01・02の位置関係 (SB01=実線、SB02=破線)



第28図 SB02出土遺物実測図 (S=2/3)



図版50 SB02出土遺物 (S=2/3)

表8 SB02出土遺物観察表

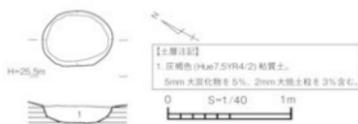
図版番号	出土地区	層位	器種	部位	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
1	3区	3層	石鍋	口縁部	滑石	(52.0)	—	17.0	(41.94)	鈣付型
2	3区	3層	石鍋	胴部	滑石	—	—	11.0	(32.39)	二次加工品か

(4) 土坑 (SK)

SK03~06 2~4区より3基を検出。なお、SK01・02は埋甕に使用しているため、土坑の遺構番号としては使用しない。

① SK03

4区4層から検出した。長径0.56m、短径0.45m、深さ0.14mで楕円形のプランである。



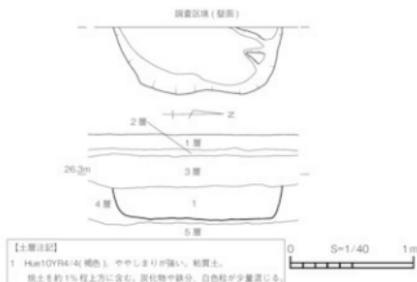
第29図 SK03実測図 (S=1/40)



図版51 SK03完掘状況

② SK04

2区4層から検出した。長径1.37m、短径はプランの半分ほどが調査範囲外だったため不明、深さが0.27mで楕円形のプランである。



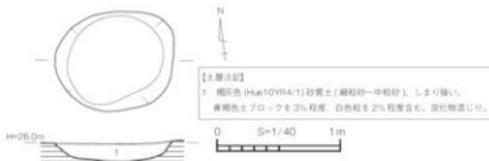
第30図 SK04実測図 (S=1/40)



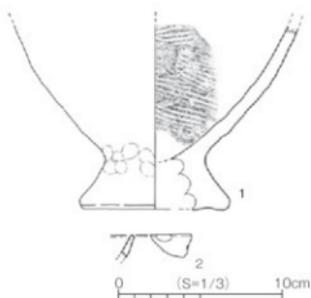
図版52 SK04完掘状況

③ SK05

3区3層から検出した。長径0.96m、短径0.82m、深さ0.15mで楕円形のプランである。出土遺物は2点で、1は縄文時代晩期の粗製深鉢の底部である。復元底径8.4cmを測る。調整は内面が貝殻条痕、外面はナデ調整を施しており、底部は平底で底部側面が三角形に外側に張り出す。底部側面の屈曲部に指オサエ跡が残る。2は碗の口縁部で大宰府条坊跡の編年における龍泉窯小椀1類と考えられる。時期は12世紀中頃~12世紀後半。なお、1に関しては遺構の覆土直下の包含層出土の可能性が高く、本来の遺構の年代は2に近いと思われる。



第31図 SK05実測図 (S=1/40)



第32図 SK05出土土器実測図 (S=1/3)



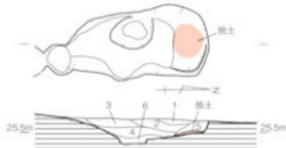
図版53 SK05出土土器

表9 SK05出土遺物観察表

図版番号	出土地区	層位	器種	部位	色調		調整		焼成	胎土	備考
					外面	内面	外面	内面			
1	3区	3層	深鉢	胴部~底部	明赤褐色 (Hue5YR5.6)	暗灰色 (7.5YR4.1)	ナア	貝殻表肌	良好	雲母、砂粒	
2	3区	3層	青磁皿	杯部~脚部	灰白色 (Hue10Y7.2)	灰白色 (Hue10Y7.2)	施釉	施釉	良好	黒色粒子、長石	龍泉窯青磁皿1類

④ SK06

3区4層から検出した。長径1.15m、短径0.49m、深さ0.19mで不整形なプランを有する。多量の焼土塊や炭化物を含むことから、土坑内もしくは周辺にて火を使用したと思われる。



【土器注記】

1 濃い褐色(7.5YR5-6)粘質土、微細の焼土粒を全体に含む。	5 灰黄褐色(10YR4.2)粘質土。
2 濃い黄褐色(10YR5-6)粘質土、20cm×2.40m大の焼土ブロックを含む。	6 黄(7.5YR2-1)炭化物を含む。
3 濃い黄褐色(10YR5-6)粘質土、1cm×1-20cm大の炭化物を1%含む。	
4 黄褐色(7.5YR4-2)粘質土、20cm×20cm大の炭化物を7%含む。	
40cm×20cm大の4角ブロックを3%含む。	

第33図 SK06実測図 (S=1/40)



図版54 SK06完掘状況

表10 土坑一覧表

遺構番号	調査区	グリッド	層位	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	形状	備考
SK01								欠番 (埋藏に使用)
SK02								欠番 (埋藏に使用)
SK03	4区	9438	4層	0.56	0.45	0.14	楕円形	炭化物、焼土粒を含む
SK04	2区	0040	4層	1.37	0.55+	0.27	楕円形	炭化物、焼土粒を含む
SK05	3区	9638	3層	0.96	0.82	0.15	楕円形	縄文晩期 (深鉢)、朝鮮系青磁椀
SK06	3区	9640	4層	1.15	0.49	0.19	不整形	多量の焼土塊や炭化物を含む

(5) 柱穴 (SP)

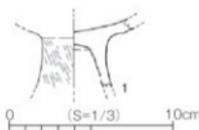
柱穴は調査区全体で36基検出したが、いずれも規則性がなく、建物を構成するようなものではないと判断した。そのうち遺物が伴っているものはごく少数で、図化に耐えるものはSP29内出土の1点のみであった。そのため、SP29については詳細を記載し、その他の柱穴に関しては観察表による記載のみとする。

SP29

3区4d層から検出した。長径0.34m、短径0.29m、深さ0.38mの楕円形のプランを有する。出土遺物は土師器高杯片が1点出土している。1は高杯の脚部～杯部である。内外面ともにナデ調整で、外面はその後ハケ目を施す。古墳時代ものと思われる。



第34図 SP29実測図 (S = 1/40)



第35図 SP29出土土器実測図 (S = 1/3)



図版55 SP29出土土器

表11 SP29出土遺物観察表

図版番号	出土地区	層位	器種	部位	色調		調整		焼成	胎土	備考
					外面	内面	外面	内面			
1	3区	3層	高杯	杯部~脚部	灰黄色 (Hue2.5YR7/2)	浅黄色 (2.5YR7/3)	ナデ	ハケ目	ナデ	やや甘い	炭粒、砂粒

表12 柱穴一覧表

遺構番号	調査区	グリッド	層位	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	形状	備考
SP01	4区	9438	3a層	0.55	0.48	0.28	円形	弥生土器小片
SP02	4区	9438	3a層	0.29	0.31	0.20	円形	弥生土器小片
SP03	4区	9438	3a層	0.26	0.26	0.25	円形	SP01を切る、弥生土器小片
SP04	4区	9438	3a層	0.38+	0.43	0.23	円形	SP03に切られる、弥生土器小片
SP05	4区	9438	3a層	0.27	0.27	0.17	円形	弥生土器小片
SP06	4区	9438	3a層	0.51	0.40	0.19	楕円形	弥生土器小片
SP07	4区	9438	3a層	0.32	0.34	0.20	円形	弥生土器小片
SP08	4区	9438	3a層	0.49	0.35	0.28	楕円形	弥生土器小片
SP09	4区	9438	3a層	0.23	0.20	0.53	円形	縄文・弥生土器小片
SP10	4区	9438	3a層	0.37	0.28	0.25	円形	
SP11	4区	9438	3a層	0.31	0.28	0.20	円形	
SP12	4区	9438	3a層	0.28	0.26	0.18	円形	
SP13	3区	9640	4d層	0.33	0.33	0.31	円形	
SP14	3区	9640	4d層	0.16	0.17	0.09	円形	
SP15	3区	9640	4d層	0.24	0.24	0.37	円形	
SP16	3区	9640	4d層	0.23	0.21	0.15	円形	
SP17	3区	9640	4d層	0.17	0.16	0.17	円形	
SP18	3区	9638	4d層	0.22	0.23	0.15	円形	
SP19	3区	9638	4d層	0.51	0.29	0.36	円形	
SP20	3区	9638	4d層	0.23	0.21	0.15	円形	
SP21	3区	9840	4d層	0.23	0.20	0.19	円形	
SP22	3区	9838	4d層	0.30	0.27	0.20	円形	
SP23	3区	9638	4d層	0.36	0.28	0.32	楕円形	
SP24	3区	9638	4d層	0.25	0.25	0.41	円形	
SP25	3区	9638	4d層	0.25	0.20	0.23	楕円形	
SP26	3区	9638	4d層	0.22	0.24	0.34	円形	
SP27	3区	9640	4d層	0.22	0.15	0.18	楕円形	
SP28	3区	9640	4d層	0.21	0.22	0.14	楕円形	
SP29	3区	9638	4d層	0.34	0.29	0.38	楕円形	土師器 (高杯)
SP30	3区	9638	4d層	0.26	0.24	0.23	円形	
SP31	3区	9640	4d層	0.29	0.19	0.28	楕円形	
SP32	3区	9638	4d層	0.32	0.32	0.43	円形	
SP33	3区	9638	4d層	0.26	0.30	0.38	楕円形	
SP34	3区	9638	4d層	0.44	0.40	0.36	楕円形	
SP35	3区	9638	4d層	0.29	0.26	0.35	楕円形	
SP36	3区	9638	4d層	0.34	0.36	0.52	楕円形	

(6) 遺物集積区 (SU)・炉跡 (SL)

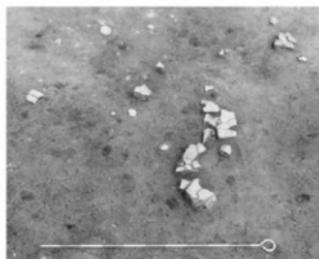
SU01~03 一定量の遺物が集中して出土した箇所を遺構として認定している。3区でSU01とSU02、2区でSU03 (SL01) の計3基を検出した。

① **SU01**

3区4d層直上から検出した。検出時には土坑や落ち込みなどのプランは確認できず、単純に遺物がまどまって出土しただけのように感じられた。遺物に関しては、P1~P15の番号を付与して取り上げている。P4~P15の破片が接合時に繋がっており、P1~P3も同一と思われる。出土状況から廃棄されたものである可能性が高い。1は口縁部~頸部で復元口径51.4cmを測る。調整は両面ともに貝殻条痕、その後にナデ調整を施す。口縁は緩やかな波状口縁を呈する。波頂部から頸部付近に垂下沈線を施し、その沈線の両側から放射状に広がるように沈線を巡らす。さらに、垂下沈線と屈曲部の重なる箇所にリボン状の突起を貼り付け、その周辺を丁寧になでる。長崎県島原市に所在する礫石原遺跡及び肥賀太郎遺跡や同県大村市の黒丸遺跡や竹松遺跡において出土している土器と類似しており、型的には黒川式並行期の礫石原遺跡を標識とする礫石原タイプのもと考えられる。2は口縁部である。内外面ともに貝殻条痕を施した後にナデ調整。口縁部から緩やかに外反しており、頸部でくびれる形状と推測する。口縁部から胴部にかけて斜めに下る3条の弧状沈線があり、1と同じ礫石原タイプのものではないかと思われる。



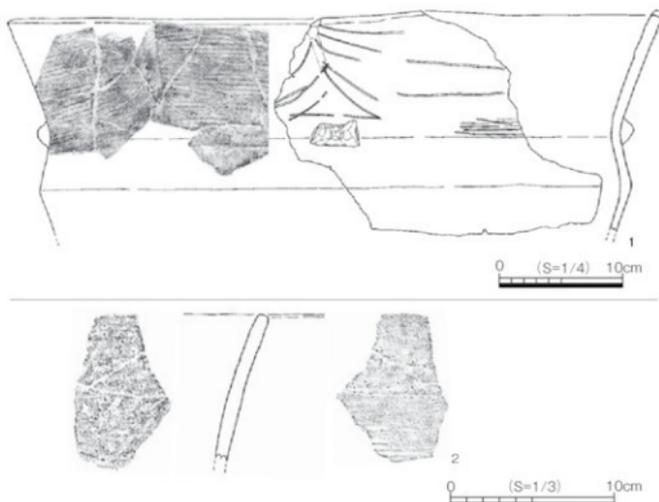
第36図 SU01実測図 (S=1/20)



図版56 SU01遺物出土状況



図版57 SU01出土土器



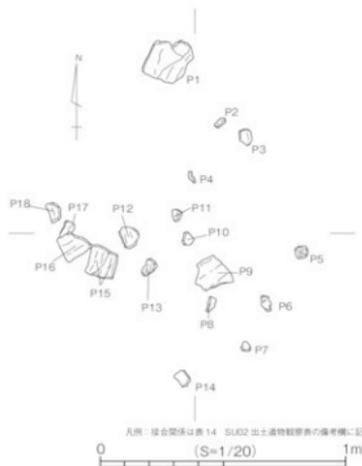
第37図 SU01出土土器実測図 (1 : S= 1 / 4、2 : S= 1 / 3)

表13 SU01出土遺物観察表

採取番号	出土地区	層位	器種	部位	色調		調整		地成	粘土	備考
					外面	内面	外面	内面			
1	3区	3層	深鉢	口縁部～胴部	に.赤+黄褐色 (3Ba10YR7-4)	に.赤+黄褐色 (3Ba10YR7-3)	赤敷→ナデ	赤敷→ナデ	中々甘い	石英、長石、雲母	P4～P15融合
2	3区	3層	深鉢	口縁部	褐色 (7.5YR7-6)	に.赤+黄褐色 (10YR7-3)	赤敷→ナデ	赤敷→ナデ	良好	長石、陶屑石、輝石	P3

② SU02

3区4d層直上から検出した。SU01と同様に土坑等のプランは確認できなかった。遺物はP1～P18の取り上げ番号を付与して個別に取り上げているが、ほとんどの破片が同一個体のもと考えられる。P1とP9が接合できており、比較的に残りが良いので代表する遺物として掲載する。1は口縁部～胴部で復元口径43.0cmを測る。調整は内面がナデ、外面が貝殻条痕を施す。胴部から口縁部にかけて緩やかに広がり、口縁部は直立する。



第38図 SU02実測図 (S= 1 / 20)



図版58 SU02遺物出土状況



図版59 SU02出土土器



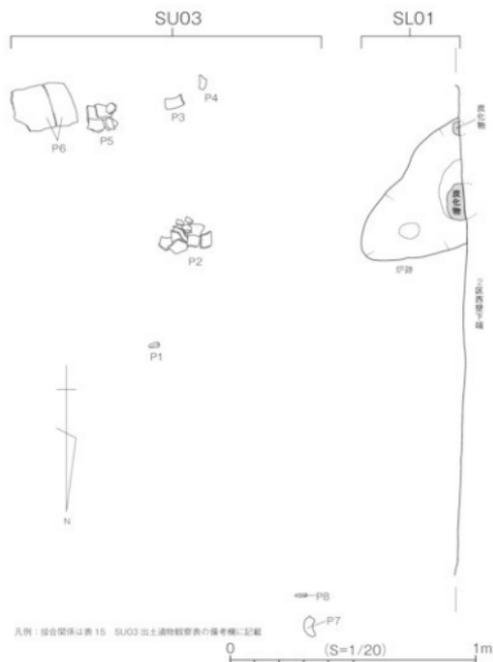
第39図 SU02出土土器実測図 (S=1/4)

表14 SU02出土遺物観察表

採取番号	出土地区	層位	器種	部位	色調		調整		焼成	胎土	備考
					外面	内面	外面	内面			
1	3区	3層	深鉢	口縁部~胴部	灰黄褐色 (Hue10YR4-2)	黒褐色 (Hue10YR3-1)	貝殻条痕	ナデ	良好	石英、長石、砂粒	P1・P9統合

③ SU03・SL01

2区4層最下層から検出した。SU01・02と同じく、遺物が出土した周辺で遺構と思われるプランは見受けられなかったが、5~60cmほど東側の調査区壁面付近で多量の炭化物を含む不整形な落ち込みを検出した。落ち込み内の炭化物と比較すると少量になるが、遺物出土地点付近の土にも炭化物が含まれていたことから、堅穴建物跡等の一連の遺構である可能性を考慮して、落ち込みを含む範囲をSU03と考えた。遺物に関しては、P1~P8の番号を付与して取り上げた。1~3は縄文時代晩期の粗製深鉢の口縁部である。1の器形は砲弾型を呈する。内外面ともに貝殻条痕を施し、その後ナデ調整を行う。2は復元口径48.4cmを測る。調整は内外面ともに貝殻条痕を施し、その後ナデ。3は鱗状の突起を有し、口縁部は緩やかに外反する。4は縄文時代晩期の粗製深鉢の底部である。復元口径9.0cmを測る。調整は内面がナデ、外面は屈曲部より上位が貝殻条痕、下位をナデ調整。底面は上げ底で貝殻条痕と思われる調整が残る。



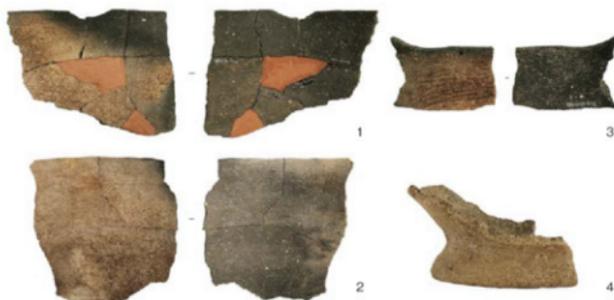
第40図 SU03・SL01実測図 (S=1/20)



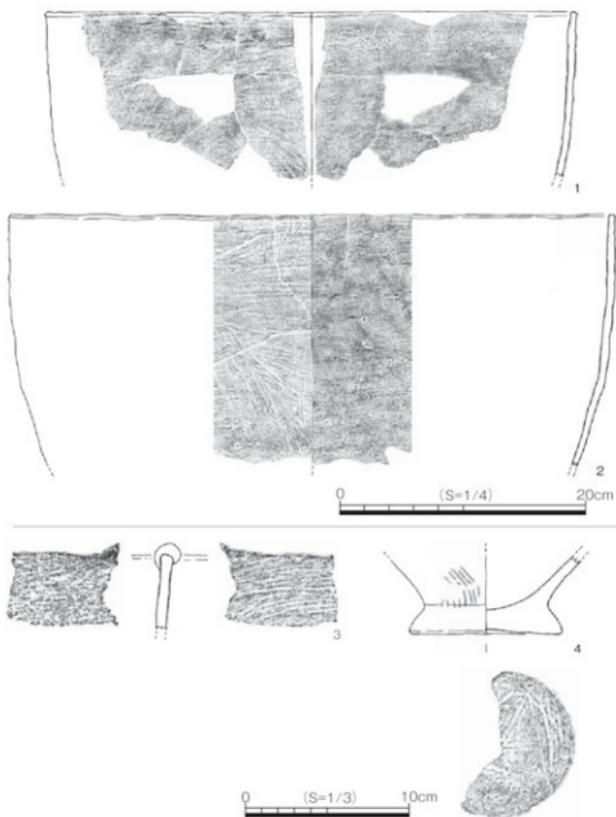
図版60 SU03・SL01検出状況



図版61 SU03遺物出土状況



図版62 SU03出土土器



第41図 SU03出土土器実測図 (1・2 : S=1/4、3・4 : S=1/3)

表15 SU03出土遺物観察表

図版 番号	出土地区	層位	器種	部位	色調		調整		焼成	胎土	備考
					外面	内面	外面	内面			
1	2区	4層	深鉢	口縁部~胴部	にじみ・黄褐色 (Hac10YR7/4)	黒褐色 (Hac10YR3/1)	条痕→ナデ	条痕→ナデ	良好	石英、雲母、長石	
2	2区	4層	深鉢	口縁部	にじみ・黄褐色 (Hac10YR7/4)	黒褐色 (Hac10YR3/1)	条痕→ナデ	条痕→ナデ	良好	石英、雲母、長石、砂粒	
3	2区	4層	深鉢	口縁部	灰黄褐色 (10YR4/2)	黒色 (7.5YR2/1)	貝殻条痕	条痕→ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	縞状突起、圧痕
4	2区	4層	深鉢	底部	にじみ・黄色 (Hac2.5YR6/3)	黄灰色 (Hac2.5YR4/1)	条痕、ナデ	ナデ	やや甘い	長石、角閃石、雲母	上付底

7 包含層出土遺物

立小路遺跡の本調査において、縄文時代後期～中近世の遺物が約20箱出土した。割合は、縄文時代の遺物が全体の大半を占める約7割。弥生時代の遺物が約1割、中世の遺物が約1割、その他の時代の遺物が1割程度である。縄文時代の遺物のうち9割近くが縄文時代晩期の土器類であり、晩期以外の遺物はごく少数に留まる。これらの出土遺物のうち、出土位置の重要性が高いか、もしくは年代やモノの特徴など情報量を多く含み、図化に耐えうる遺物のみを掲載した。

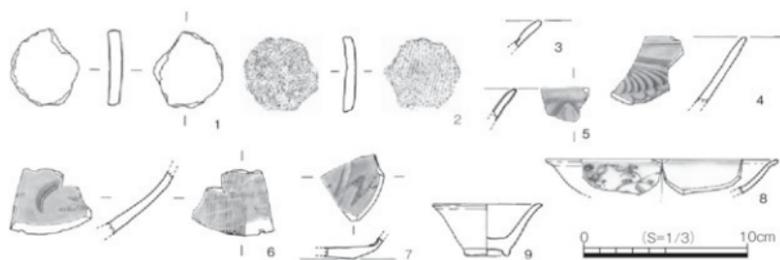
(1) 1・2層の遺物

①土器

1・2は弥生時代の土器片の二次加工品である。1は内外面ともにナデ調整。甕や壺の破片と思われる土器片を転用している。メンコと呼ばれる土器加工品の可能性が高い。2はやや薄めの土器を使用し、内外面ともにハケ目が残る。3は皿の口縁部である。内外面ともに施釉し、無文である。体部上位で内湾し、屈曲部の内面に沈線状の釉溜まりを有する。大宰府条坊跡 XV の編年における白磁皿のⅥ類と思われる。時期は11世紀後半～12世紀前半。4～7は碗と皿である。4は碗の口縁部で体部内面に横から見た葉文を加えた、片彫蓮花文を有する。外面は無文、内外面ともに施釉する。大宰府条坊跡 XV の編年における龍泉窯系青磁碗のⅠ類と思われる。時期は12世紀中頃～12世紀後半。5は碗の口縁部である。内面は無文、内外面ともに施釉する。体部外面に鎗蓮弁文を有し、蓮弁の幅はやや広い。口縁端部は外反する。大宰府条坊跡 XV の編年における龍泉窯系青磁碗のⅢ類と思われる。時期は13世紀中頃～14世紀初頭前後。6は碗の体部である。体部内面に簡略化した花文とジグザグ状の点描文、体部外面に細かい縦の櫛目文を有する。内外面ともに施釉するが、体部下位は露胎である。大宰府条坊跡 XV の編年における同安窯系青磁碗のⅠ類と思われる。時期は12世紀中頃～12世紀後半。7は皿の底部である。内外面ともに施釉するが、体部下位は露胎である。体部中位で屈曲し、その上位は外側へ反転する。その内面は段上になる。大宰府条坊跡 XV の編年における同安窯系青磁皿のⅠ類と思われる。時期は12世紀中頃～12世紀後半。8は明染付皿の口縁部で復元口14.0cmを測る。内外面に染付を有し、口縁部は端反である。15世紀後半～16世紀前半の所産と思われる。9は近世の猪口である。復元口径は6.4cm程度となり、底径2.5cm、器高3.2cmを測る。壘付け以外はすべて施釉を施し、焼成時に高台下に砂を敷いている。口縁部は端反で多量の煤が付いていることから、灯明皿への転用が考えられる。九州陶磁の編年（九州近世陶磁学会）における猪口の編年のⅢ類と思われる。時期は17世紀半ば～17世紀後半頃。

②石器

1は安山岩製の石包丁の刃部片である。表面の一部と刃縁が残存し、刃部は両刃となっている。2は安山岩製の打製石斧で形状は短冊形の完形品。表裏の厚みのある部分に磨減痕が残る。背面に自然面がある横長剥片を素材として使用。3は蛇紋岩製の磨製石斧の刃部片である。基部側からの剥離により欠損する。研磨は刃部から体部まで施されている。側縁部に研磨による平坦面を持つ。



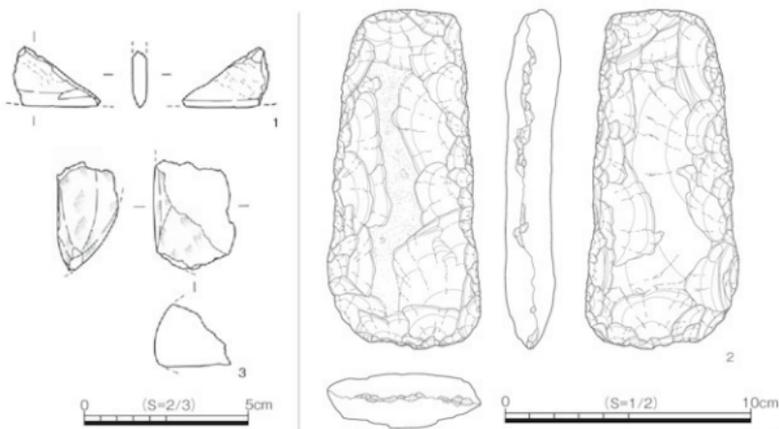
第42図 1・2層出土土器 (S=1/3)



図版63 1・2層出土土器

表16 1・2層出土土器観察表

図版 番号	出土地区	層位	器種	部位	色調		調整		焼成	胎土	備考
					外面	内面	外面	内面			
1	4区	1層	メソコ	—	褐色 (Hae5Y6 6)	明黄褐色 (Hae10Y7 6)	ナデ	ナデ	やや甘い	石灰、長石、砂粒	赤生土器片を利用
2	4区	1層	メソコ	—	にぶい黄褐色 (Hae10YR5 3)	褐色 (Hae7.5YR6 6)	ナデ	ナデ	良好	長石、雲母	赤生土器片を利用
3	1区	2層	白磁皿	口縁部	オリーブ灰色 (Hae10Y6 2)	オリーブ灰色 (Hae10Y6 2)	施軸	施軸	良好	黒色粒、長石	白磁土質類
4	1区	2層	青磁碗	口縁部	灰オリーブ色 (Hae7.5Y5 2)	灰オリーブ色 (Hae7.5Y5 2)	施軸	施軸	良好	黒色粒	龍泉窯系青磁皿1類
5	1区	2層	青磁碗	口縁部	暗オリーブ色 (Hae7.5Y4 3)	暗オリーブ色 (Hae7.5Y4 3)	施軸	施軸	良好	長石	龍泉窯系青磁皿類
6	1区	2層	青磁碗	胴部	灰オリーブ色 (Hae7.5Y6 2)	灰オリーブ色 (Hae7.5Y6 2)	施軸	施軸	良好	長石、砂粒	同安楽系青磁皿1類
7	3区	2層	青磁皿	底部	灰オリーブ色 (Hae7.5Y6 2)	灰オリーブ色 (Hae7.5Y6 2)	施軸	施軸	良好	黒色粒、長石	同安楽系青磁皿1類
8	4区	2層	染付皿	口縁部	明緑灰色 (Hae7.5GY8 1)	明緑灰色 (Hae7.5GY8 1)	施軸	施軸	良好	黒色粒	明染付
9	2区	2層	近世磁器	口縁部-底部	灰白色 (Hae10Y8 1)	灰白色 (Hae7.5Y8 1)	施軸	施軸	良好	黒色粒	石明皿へ転用の可能性あり



第43図 1・2層出土石器 (1・3 : S=2/3、2 : S=1/2)



図版64 1・2層出土石器

表17 1・2層出土石器観察表

図版番号	出土地区	層位	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
1	1区	2層	石包丁	安山岩	(17.0)	(20.0)	4.0	(2.10)	両刃
2	1区	2層	打製石斧	安山岩	142.0	64.5	17.5	229.11	短冊形
3	1区	2層	磨製石斧	蛇紋岩	(34.0)	(24.0)	(19.0)	(16.73)	

(2) 3層の遺物

①土器

1は縄文時代晩期の粗製深鉢である。底部で底径8.9cmを測る。調整は内外面がナデ、底面はナデ調整と指圧痕が残る。底部は平底でかなり厚みがあり、底部外面が三角形に外側に張り出す。2は弥生時代の壺の肩部である。調整は内外面ともにナデ。横線に×を重ねたような線刻を有する。3は

弥生時代中期後葉の甕の口縁部で復元口径32.0cmを測る。内外面ともにナデ調整。口縁部は鐮先型を呈する。長崎県杵岐市に所在する原の辻遺跡の弥生土器・古式土師器編年案（宮崎編年）における須玖Ⅱ式古段階の弥生中期Ⅳ期と思われる。4は古墳時代の高杯の頸部～脚部で底径12.4cmを測る。調整は外面全体と内面の底部付近がナデで、外面にはハケ目がうっすらと残る。外面に内面の頸部付近はケズリや絞り痕が残る。脚部はラッパ状に広がる。原の辻編年（宮崎編年）の古墳Ⅲ～Ⅳ期と思われる。時期は4世紀中頃～4世紀後半。5・6は須恵器の甕である。5は口縁部で復元口径26.0cmを測る。調整は内外面ともにナデ。9世紀中頃～10世紀前半の所産ではないかと思われる。6は頸部である。調整は内外面ともにナデ。内面は稜が残り、頸部は無文でかなり直立している。5と同一個体。7は東播系須恵器の捏ね鉢の底部で復元底径10.2cmを測る。調整は内外面ともに回転を利用した横ナデ、底部はヘラ切り離し後にナデ調整。13世紀代の所産か。8・9は中世の朝鮮系白磁碗と白磁浅型碗である。8は碗の底部で復元底径6.0cmを測る。内外面ともに施釉しているが、高台付近は露胎である。内面はかなり丸みを帯びた形をしており、内面見込みに沈線を施す。高台は外面をほぼ垂直に削り、内面側は斜めに削り取る。大宰府条坊跡ⅩⅤの編年におけるⅡ類もしくはⅣ類と思われる。時期は11世紀後半～12世紀前半頃になる。9は浅型碗の底部で復元底径3.2cmを測る。内面見込みに毛彫り花文を施す。12世紀の所産と考えられ、大宰府条坊跡ⅩⅤの編年における白磁浅型碗のⅩⅢ類と思われる。10は、中世の朝鮮系青磁皿の口縁部～胴部で復元口径10.6cmを測る。口縁部は僅かに外反し、口縁部下の体部は内湾する。内面見込みにジグザグ状の櫛点描文を有する。大宰府条坊跡の編年における同安瀛系青磁皿のⅠ類と思われる。時期は12世紀中頃～12世紀後半。11は中世の朝鮮系青磁皿の底部の二次加工品である。メンコとして加工している可能性がある。使用されている磁器片は10と同様の同安瀛系青磁皿のⅠ類と思われる。

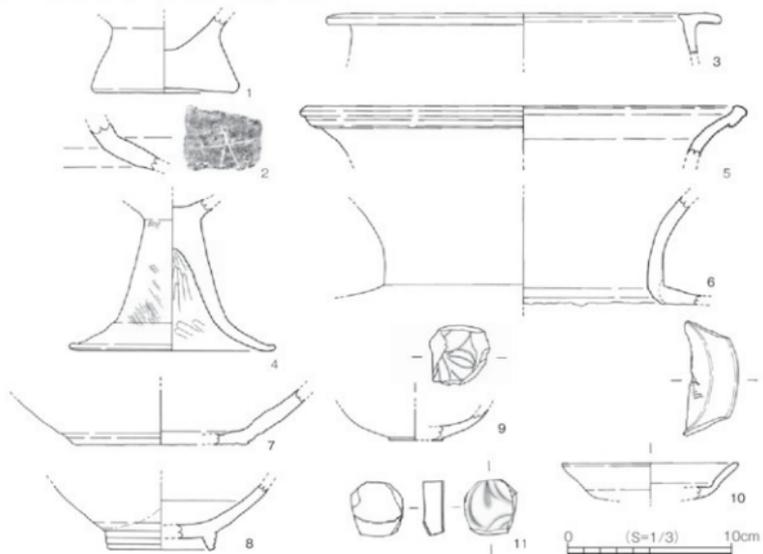
②石器

1は安山岩製の石鎌で基部は凹状を呈し、先端部は欠損する。脚部の形状が左右で異なっている。2～4は黒曜石製の石核である。2は表の作業面と裏面で見られる剥離面のほかはパティナが進行している。なおパティナが確認される箇所は人為的な剥離は行われていないと思われる。3は円礫を素材としている。a、b二つの作業面があり、a面は下・右方向、b面は左方向の剥離跡が観察される。自然面を打面になっている。4は表面と打面以外は自然面が見られる。5と6は安山岩製の石包丁である。5は石包丁の刃部片で裏面の一部が欠損し、両面ともに若干の研磨痕が残る。片刃の刃部を有する。6は石包丁の刃部～背部である。全体的に剥落しているため研磨痕は確認できない。刃部は両刃と思われる。7と8は滑石製石鍋の口縁部および鋳部である。7は鋳付型で器厚や内面の傾斜の度合いからかなり小型のものと推測される。全体的に明瞭なノミ痕が残る。木戸編年（木戸雅寿1995）におけるⅢ-a類に相当する。時期は12世紀初頭～12世紀後半頃。8も7と同じく鋳付型のⅢ-a類（木戸編年）と思われるが、鋳は極端に低く、明瞭なノミ痕が残っており、本来の高さから削られている可能性が高い。外面全体には炭化物が付着しているが、鋳部にも付着していることから、加工後に被熱を受けている。用途は不明だが、二次加工品と考えられる。なお、内面にあった交差する2条の溝は、痕跡が新しかったためガジリと判断した。9は結晶片岩製の有孔石器で半分ほど欠損する。側面から見ると台形状を成しており、石錘の可能性が高い。

③舶載鏡とガラス玉

1は前漢末の舶載鏡の破鏡片である。両面とも本来の調整や文様などが見えなくなるまで研磨しており、鏡面に穿孔を施す。異体字銘帯鏡か方格規短鏡の可能性があるといる。(註1) 2はガラス小玉である。外径6.42mm、内径2.74mm、高さ4.52mmを測る。色調は紺色。

註1 九州大学 辻田淳一郎准教授より御教示を受けた。



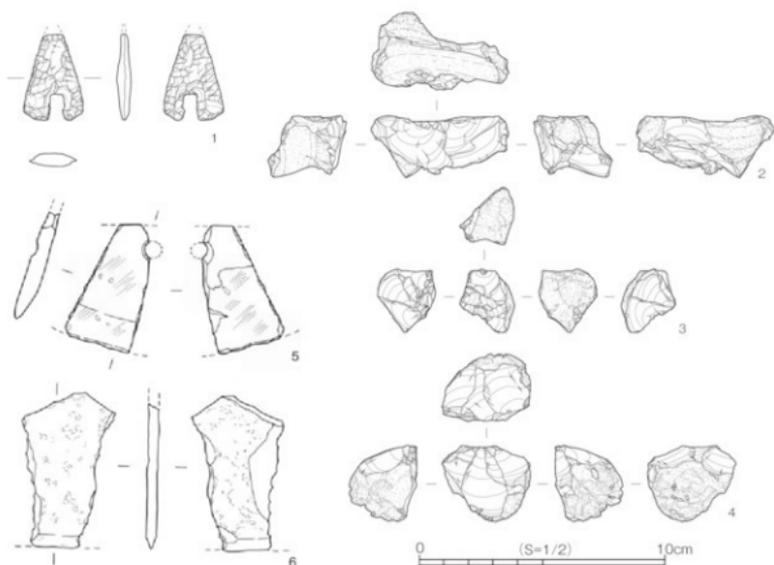
第44図 3層出土土器 (S=1/3)



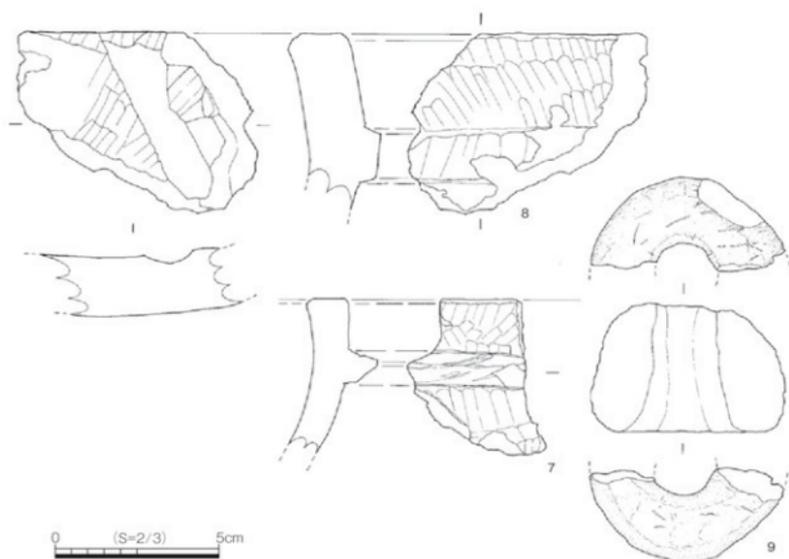
図版65 3層出土土器

表18 3層出土土器観察表

図版番号	出土地区	層位	器種	部位	色調		調整		焼成	胎土	備考
					外面	内面	外面	内面			
1	1区	3層	深鉢	底部	棕色 (Hae2.5YR6.6)	褐色 (Hae5YR5.1)	ナデ	ナデ	良好	雲母、角閃石、長石	平底
2	4区	3層	壺	肩部	淡赤棕色 (Hae2.5YR7.3)	淡赤棕色 (Hae2.5YR7.4)	ナデ	ナデ	ややいい	長石、砂粒	縦割あり
3	2区	3層	壺	口縁部	黒褐色 (Hae10YR3.1)	明黄褐色 (Hae10YR6.6)	ナデ	ナデ	良好	長石、雲母	須玖Ⅱ式
4	4区	3層	高杯	肩部～脚部	赤棕色 (Hae10Y5.2)	赤色 (Hae10Y5.8)	ハケ目→ナデ	ナデ、ケズリ	良好	長石、雲母	
5	4区	3層	壺	口縁部	灰色 (N5)	灰色 (N6)	ナデ	ナデ	良好	長石、砂粒	6と同一個体
6	4区	3層	壺	肩部	灰色 (N5)	灰色 (N6)	ナデ	ナデ	良好	長石、砂粒	5と同一個体
7	2区	3層	椀鉢	底部	灰白色 (N7)	灰色 (N6)	横ナデ	横ナデ	やや良好	黒色粒	底部ヘラ切り跡し
8	2区	3層	白磁碗	底部	浅黄色 (Hae2.5Y7.3)	灰黄色 (Hae2.5Y7.2)	施軸	施軸	良好	黒色粒	白磁碗Ⅱ類もしくはⅢ類
9	2区	3層	白磁皿	底部	灰白色 (Hae10Y8.1)	灰白色 (Hae10Y8.1)	施軸	施軸	良好	黒色粒	白磁浅型ⅡⅢⅣⅤⅥ類
10	4区	3層	青磁皿	口縁部～脚部	灰オリーブ色 (Hae7.5Y6.2)	灰オリーブ色 (Hae7.5Y6.2)	施軸	施軸	良好	長石	同安楽系青磁Ⅰ類
11	2区	3層	メンコ	—	オリーブ灰色 (Hae10Y6.2)	オリーブ灰色 (Hae10Y6.2)	施軸	施軸	良好	黒色粒、長石	同安楽系青磁Ⅰ類を使用



第45図 3層出土土器① (S=1/2)



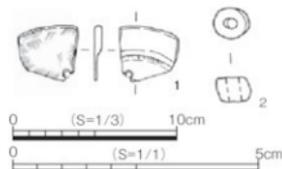
第46図 3層出土石器② (S=2/3)



図版66 3層出土石器

表19 3層出土石器観察表

図版番号	出土地区	層位	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
1	4区	3層	石鏃	安山岩	255.0	180.0	4.0	1.59	先端部欠損
2	2区	3層	石核	黒曜石	25.3	55.5	31.8	29.97	
3	2区	3層	石核	黒曜石	26.0	21.8	23.0	8.67	
4	4区	3層	石核	黒曜石	31.0	35.8	27.4	28.68	
5	4区	3層	石包丁	安山岩	(38.0)	(19.5)	5.5	(5.84)	片刃
6	2区	3層	石包丁	玄武岩	(46.5)	(27.0)	3.5	(5.53)	
7	2区	3層	石鏃	滑石	(46.0)	(32.0)	11.0	(37.27)	
8	2区	3層	石鏃	滑石	(56.0)	(67.5)	20.0	(116.87)	
9	1区	3層	有孔石器	結晶片岩	78.0	(116.0)	39.5	(599.5)	石鏃か



第47図 3層出土の舶載鏡とガラス玉
(1 : S = 1 / 3、2 : S = 1 / 1)



図版67 3層出土の舶載鏡とガラス玉

表20 3層出土遺物観察表

図版番号	出土地区	層位	器種	色調	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
1	4区	3層	鏡	オリーブ黒色 (Hue7.5Y2/2)	(33.5)	(31.0)	5.0	(25.49)	鏡面に穿孔あり
2	4区	3層	ガラス小玉	紺色	5.0	6.4	4.5	0.27	

(3) 4層の遺物

①土器

1は深鉢の底部で復元底径15.6cmを測る。調整は内外面ともにナテ調整と指頭圧痕が残る。胎土は明赤褐色で滑石を多く含み、底部側面は外側に緩やかに広がる。佐賀県西有田町の坂の下遺跡を標識とする坂の下式土器と思われる。時期は縄文時代中期後葉～縄文時代後期前葉。2は縄文時代後期初頭の深鉢の口縁部である。調整は内外面ともにナテ調整を施す。くの字を描くような文様を施し、胎土に多量の滑石を含むことから、熊本県南福寺貝塚を標識とする南福寺式土器と考えられる。

粗製深鉢 (3～30)

長崎県教育委員会 (肥賀太郎遺跡 2006) が行った深鉢の分類を基にA～D類に細分化した。

- A類 胴部最大径付近で内湾してくびれ、口縁部にかけて緩やかに外反するが、最終的に口縁端部付近で内湾する。いわゆる「く」の字状口縁のもの。
- B類 屈曲せずに単純に広がって砲弾型をなすもの。
- C類 胴部最大径付近で内湾してくびれ、口縁部にかけて緩やかに外反するもの。
- D類 胴部最大径で内側に鋭く短く屈曲し、外反して口縁にいたるもの。その他に、屈曲部が長く緩やかで稜が不明瞭なもの。

A類は3の1点のみである。3は復元口径28.4cm、底径は10.2cmを測る。調整は内面がナテ、外面が貝殻条痕を施す。底部は平底で底部外面は三角形に外側に張り出す。胴部最大径部分で屈曲し、内湾しながら伸びていき、口縁部直下で若干内湾する。熊本県益城町所在の古閑遺跡を標識とする古閑式土器と考えられる。

B類は口縁端部が内湾するもの(4、5)や直立するもの(6~11)、外反するもの(12~15)、さらにそれぞれ3種の口縁端部に鱗ヤリボン状の突起が付くもの(内湾16・直立17・外反18)という細分化を行った。4は内外面ともに貝殻条痕を施す。5は内面がナデ、外面が貝殻条痕を施す。外面の口縁部直下に2~3mm程度の圧痕が2カ所確認できる。6は復元口径27.4cmを測る。調整は内外面ともに貝殻条痕を施し、内面はさらにナデ調整を施す。7は内外面ともに貝殻条痕を施す。8は内外面ともに貝殻条痕が残り、内面はさらにナデ調整を行う。9は復元口径40.0cmを測る。内面がナデと部分的に指頭圧痕が残り、外面は貝殻条痕を施す。10の器形は砲弾型を呈する。内外面ともに貝殻条痕を施し、その後ナデ調整を行う。11は小型の粗製深鉢のほぼ完形品である。口径19.9cm、底径7.6cm、器高16.8cmを測る。内面はナデ、外面は貝殻条痕を施す。底面から直立気味に立ち上がる平底を有する。12は内外面ともに貝殻条痕を施す。器壁の内外から焼成後に約7mm程度の穿孔が施される。13は内面がナデ調整、外面は貝殻条痕を施す。胎土と内面に明瞭な継ぎ目痕が残る。14は内面が擦過調整、外面は貝殻条痕を施す。15は内外面ともにナデ調整を施しており、指頭圧痕も残る。16は復元口径40.8cmを測る。調整は内面がナデ、外面が貝殻条痕後にナデ調整。口縁端部に鱗状の突起を有し、口縁部はやや内湾する。17は鱗状の突起を有し、口縁部は直立する。18は内外面ともに貝殻条痕を施す。口縁部は緩やかに外反し、波状口縁と鱗状の突起を有する。

C類は19~22が該当する。19は復元口径44.0cmを測る。調整は内外面ともに貝殻条痕を施しており、明瞭な指圧痕も残る。20は内外面ともに貝殻条痕を施しており、外面はさらにナデ調整を施す。21は復元口径37.2cmを測る。調整は内面がナデ、外面が貝殻条痕を施す。口縁端部に鱗状の突起を有する。22は復元口径55.0cmを測る。調整は内外面ともに貝殻条痕、その後ナデ調整を施す。口縁部は波状口縁でリボン状と鱗状の突起を有する。

D類は3層出土の12・13の黒川式並行期と23が該当する。23は復元口径60.0cmを測る。調整は内外面ともに貝殻条痕を施す。緩やかな屈曲部を持ち、稜はやや不明瞭である。口径が胴部径より大きくなる。24~26は胴部である。24は頭部~胴部で復元頭部径35.4cmを測る。調整は内面がナデ、外面は貝殻条痕を施す。25は内面が貝殻条痕を施し、その後ナデ調整。外面が貝殻条痕を施す。26は内面がナデ、外面が貝殻条痕の後にナデ。外面屈曲部にアングンの圧痕が残る。内面の下半部に炭化物が厚く付着する。27は胴部~底部で底径10.0cmを測る。調整は内面がナデ、外面は貝殻条痕を施す。器形は平底の底部を有し、胴部最大径付近で内湾してくびれる。28~31は底部である。側面が内向きに傾斜して三角形の張り出し部を持つものや直立気味に立ち上がるもの(28~30)があり、底面は平底である。またミニチュア土器(31)も出土している。28は底径6.9cmを測る。調整は外面がナデ、内面と底面は貝殻条痕、底面は貝殻条痕後にナデ調整。29は底径9.8cmを測る。調整は内外面ともに貝殻条痕だが、内面はさらにナデであり、底面はナデ調整後に木ノ葉文を施す。30は底径8.7cmを測る。調整は内外面ともにナデ、底面は貝殻条痕を施す。側面に粘土の繋ぎ目が残る。31は底径4.3cmを測る。調整は内面がナデ、外面は貝殻条痕を施す。底部は平底で底面から直立気味に立ち上がる。底面及び外面の一部に炭化物が付着する。

精製浅鉢 (32~35)

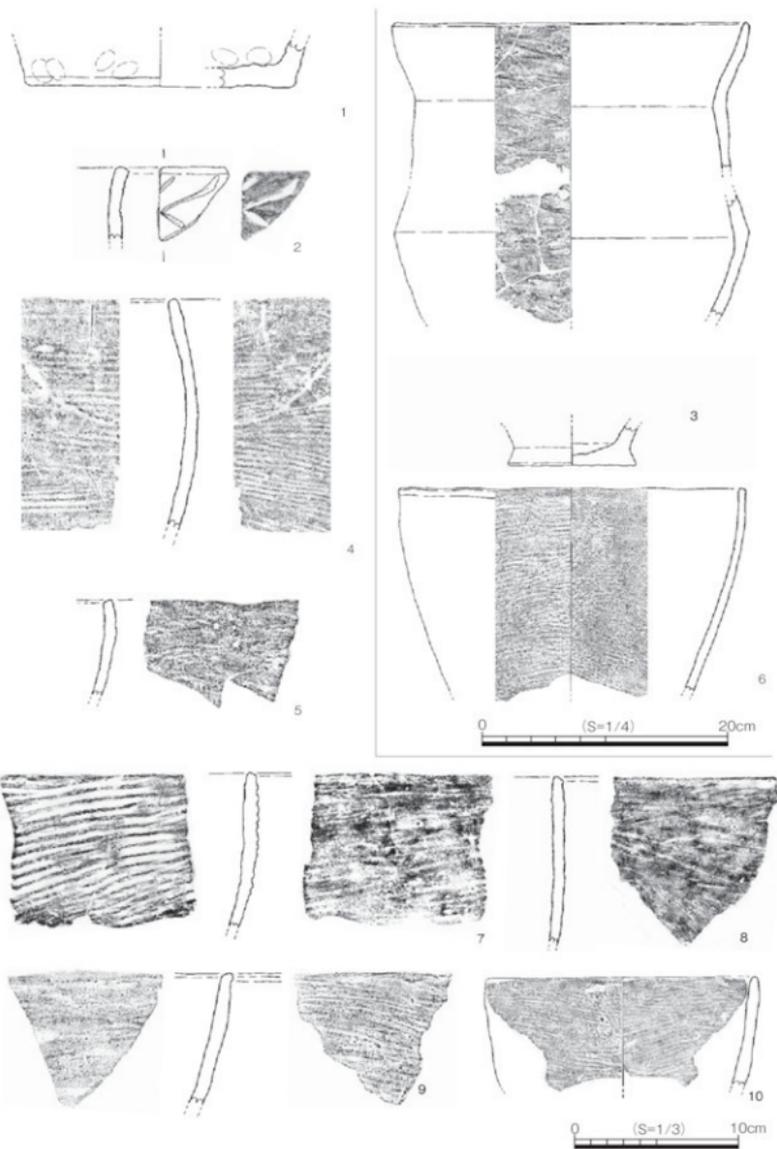
精製浅鉢は出土点数が少なく、また、図化に耐えられるものを条件にすると4点のみとなった。よって32~35の4点のみの掲載となる。32~34は口縁部である。32は復元口径8.0cmを測る。調整は内外面ともに横方向のナデを施す。内面に指ナデ痕や明瞭な粘土の継ぎ目が見られ、外面に指頭圧痕が残る。33は復元口径32.0cmを測る。内外面ともに研磨する。玉縁状口縁の内外に沈線が巡る。胴部は大きく張り出し、胴部最大径は上位となる。34は復元口径27.0cmを測る。内外面ともに研磨する。玉縁状口縁を有し、口縁部の内面にのみ沈線が巡る。頸部は短く、胴部最大径と口径の差はほとんどない。35は精製浅鉢の口縁部~胴部である。復元口径27.2cmを測る。調整は頸部外面より上位をナデ、頸部外面より下位と内面は研磨する。玉縁状口縁で内面に段を有し、外面はなだらかな形状。胴部の張り出し部に稜線を持ち、口径と胴部最大径はほとんど差がない。

36は縄文時代晩期の粗製の鉢である。復元口径11.2cmを測る。調整は内外面ともにナデ。内面に指頭圧痕、内面に明瞭な粘土接合帯が残る。外面はナデ消しているが、段が残る。底部は平底を意識した形状を呈し、底部側面から口縁部まで湾曲して立ち上がり、口縁部は直立する。類例として鹿児島県南さつま市金峰町に所在する上水流遺跡(上水流遺跡1 2007)より出土する粗製土器A17類を挙げる。37は縄文時代晩期の鉢の底部である。底径7.0cmを測る。調整は内外面ともに研磨する。底部側面に3条の沈線が巡る。さらに上下の沈線から中心の沈線を斜めに交差して×を描いたような文様が2ヵ所あり、位置関係から4方に入ると推測する。底部は平底で、沈線のあたりまで直立し、それより上位は外反しつづ広がる。九州南部地方の鹿児島県南さつま市に所在する干河原遺跡の標識土器である黒川式・干河原段階と思われる。38は縄文時代晩期末~弥生時代早期(夜臼式)の鉢の口縁部~胴部である。調整は内面がナデ、外面は口縁部~頸部がナデ、頸部より下位は貝殻条痕を施す。大きく開き外反する口縁部の直下に1つ目の刻目突帯があり、胴部最大径に2つ目の刻目突帯を有する。縄文時代晩期末~弥生時代早期の夜臼式土器と思われる。39は粗製の高杯脚部である。調整は内外面ともにナデ。胴部に3段の刺突文が巡り、脚部には6箇所透かしを有する。刺突文が巡る胴部から脚部にかけて膨らみを持たせている。長崎県南島原市所在の権現脇遺跡にて脚部に透かしを持ち、杯部に突帯を有する脚部片が出土しており、それに近いものではないかと思われる。時期は縄文時代晩期末~弥生時代早期頃。40は縄文土器の破片である。内外面ともに貝殻条痕を施す。半円形部分に加工痕らしき箇所がみられることから、形状・用途は不明だが、二次加工が施されている可能性が高い。41は甕の底部である。復元底径8.4cmを測る。調整は内面がナデ、外面に縦方向のハケ目を施す。底部は平底である。弥生時代中期の須玖Ⅱ式土器と思われる。

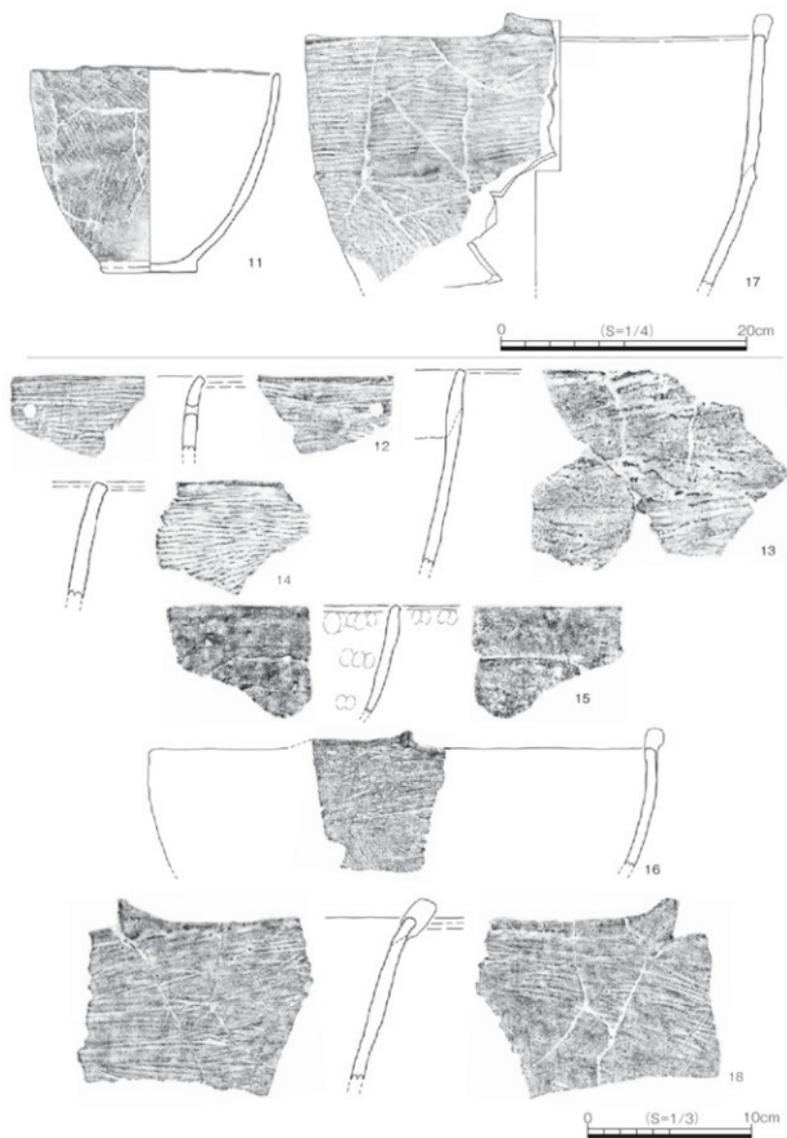
②石器

1~19は黒曜石製の縦長剥片である。色調が黒色~漆黒色の良質な黒曜石がほとんどだが、18・19のような暗灰色のものも少量ある。また作業面と主要剥離面の打撃の向きが同じものが大半を占めるが、16のように向きが異なるものも出土している。1は両側縁に連続する小剥離が残り、打面にわずかに自然面が残存する。2は表裏面の両側縁に連続する小剥離が残り、パティナが観察される。3は表裏面の両側縁に4は右側縁の表面と左側縁の裏面に連続する小剥離が残り、それぞれ裏面にバルブが残存する。5は左側縁下半分を欠損しており、表面の両側縁に連続する小剥離が残る。裏面に

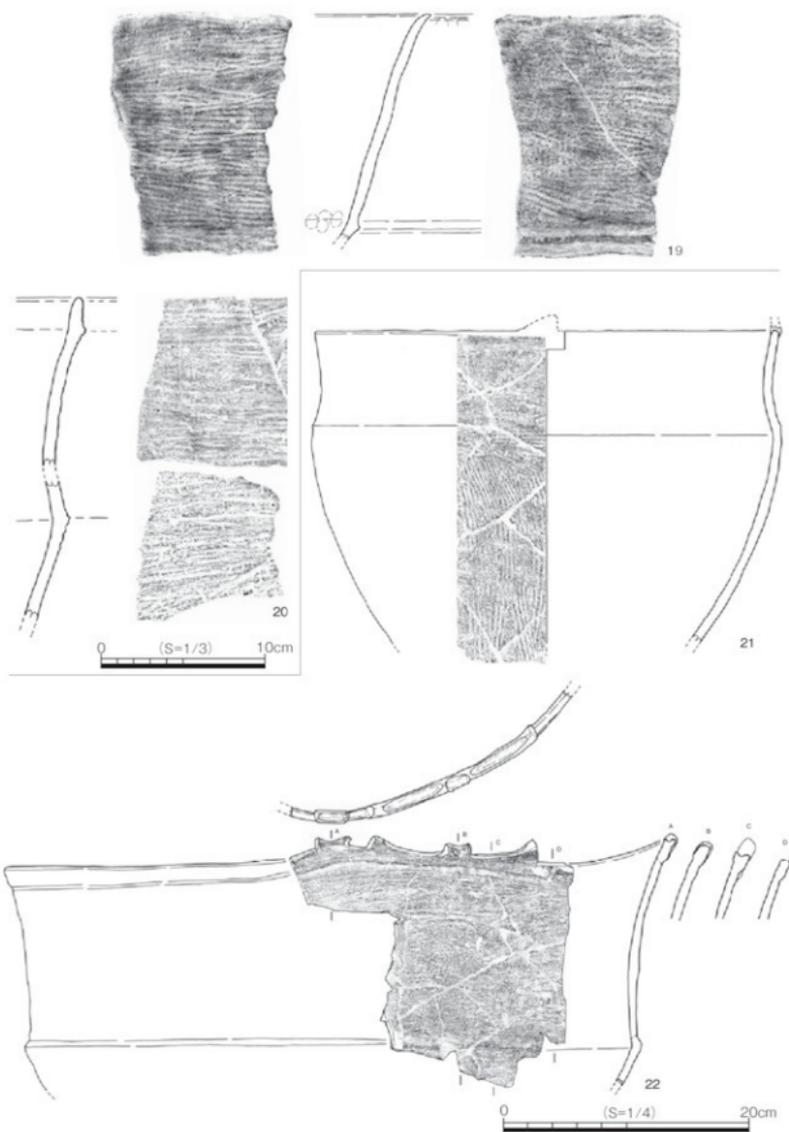
バルブが残存する。6は右側縁の表面と左側縁の表裏面に剥離痕が残し、裏面にバルブが残存する。7は左右両側縁に連続する小剥離が残る。裏面にバルブ、下端部に自然面が残存する。8は左側縁に連続する小剥離が残る。9は右側縁上半分に連続する小剥離が残る。打面に自然面、裏面にバルブが観察される。10は表面の両側縁に微細剥離が残し、表面には自然面が残存する。11は表面の左側縁に微細剥離が残る。表面に自然面、裏面にバルブが残存する。12は表面の両側縁に小剥離が部分的に残る。打面に自然面、裏面にバルブが残存する。13は表裏両面とも左右側縁に連続する小剥離が残し、左側縁にわずかに自然面が観察される。14は右側縁には3~4mm程度の平坦剥離が見られ左側縁には連続する微細剥離が残る。下端部に自然面が残存する。15は右側縁及び左側縁の上半分に連続する微細剥離が残る。打面及び正面下端に自然面が残存し、左側縁に節理面が観察される。16は両側縁に連続する微細剥離が残し、正面に自然面が残存する。17は左右両側縁に連続する小剥離が残る。18は右側縁下半分に微細剥離が見られる。表面の左側縁に自然面、裏面にバルブが残存する。19は表裏面の右側縁に連続する微細剥離、表面の左側縁にやや大きめの剥離痕が残る。裏面にバルブが残存する。20~26は黒曜石製の石鏃である。26は脚部を欠損しているため不明だが、それ以外は基部が凹基状を呈する。20・21は裏面に素材面を大きく残す。22は平面形が五角形を呈する。23は大型で厚みがあり、深く抉られた基部を持つ。25は先端部の欠損後に二次加工を施したと思われる。27は黒曜石製の楔形石器である。厚みのある不定形な剥片を素材とし、裏面には上下両端以外の側縁に連続した剥離痕が残る。28は安山岩製のスクレイパーである。厚手の剥片を素材とし裏面側に自然面を残す。右側縁には表裏両面から連続した二次加工が施される。29~37は黒曜石製の石核である。石材はすべて黒曜石で黒色~漆黒の良質なものが大半を占めており、その中に角礫(34~36)や円礫(37)を素材とするものも見られる。29は裏面側の剥片剥離を行った後、正面側に作業面を移し、180度打面転移後に正面の最終剥離が行われる。自然面が残存する。30は打面に自然面を利用しており、正面の作業面以外に裏面にも作業面が残る。なお打面は90度転移されている。31は打面転移を繰り返しており、自然面は残存していない。剥離方向に規則性は見られない。32は正面以外の左右両面でも剥片剥離が行われており、剥離方向は上からのみ行う。33は正面以外に左右両面でも薄片剥離が行われる。自然面は残存していない。34は作業面の剥離状況より90度打面転移している状況が窺える。最終剥離面の打面は自然面を利用する。35は裏面側の作業面剥離方向は下方面からで正面側と180度打面が異なる。36は作業面が複数残る。剥離方向に規則性は見られない。37は作業面が正面の他に左側面にも残存する。打面はいずれも自然面を利用している。38は安山岩製の石包丁の刃部片である。表面は大きく欠損するが、裏面はほぼ欠損も無く、刃縁も残存する。刃部は両刃となっている。39~41は扁平打製石斧である。石材は39が安山岩製で40・41は玄武岩製であり、いずれも形状は短冊形と思われる。さらに39は板状の横長剥片を素材としており、刃部による擦り痕が観察される。42・43は砥石である。42は泥岩製だが、碎屑物が水平に層状堆積しているため頁岩と思われる。表面にうっすらと残る研磨痕に研磨方向などの規則性は見られない。43はきめ細かい大型の砂岩を素材とする。上下の両端部から中心部にかけて緩やかに傾斜しており、長軸方向に研磨によると思われる浅い凹みが残る。



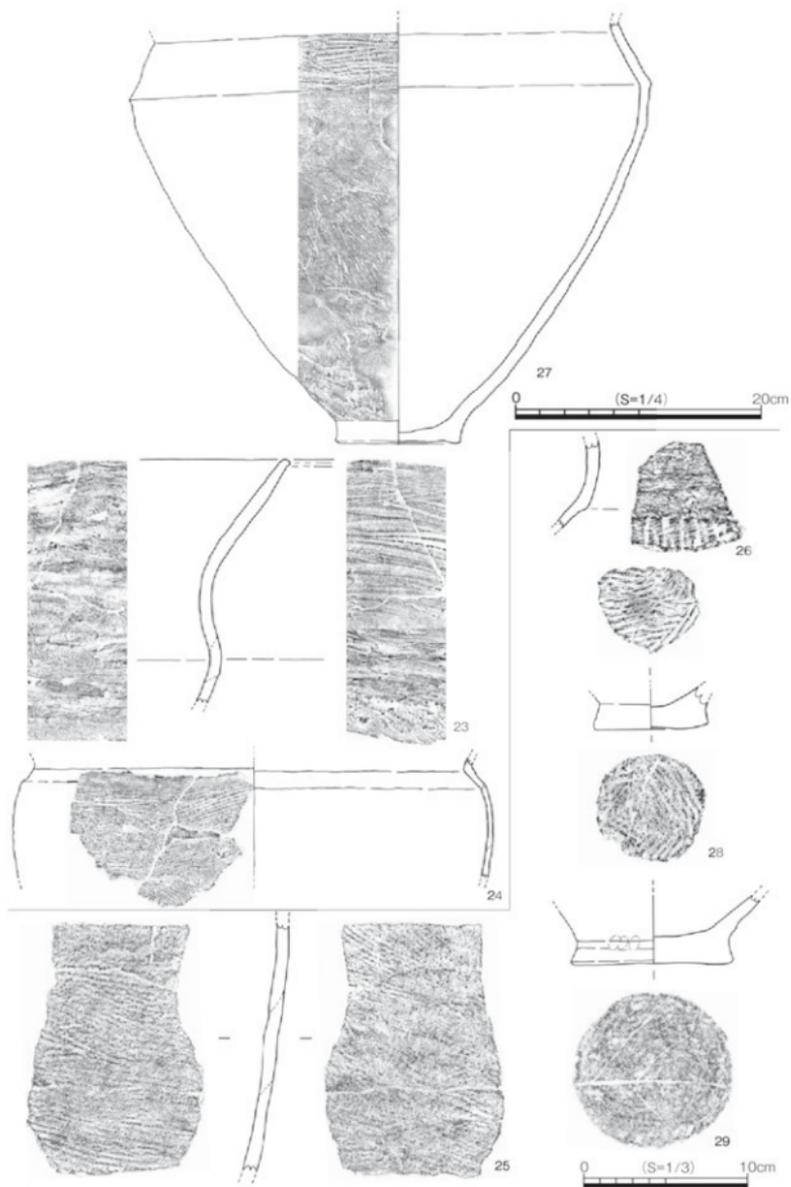
第48図 4層出土土器①
 (1・2・4・5・7~10 : S=1/3、3・6 : S=1/4)



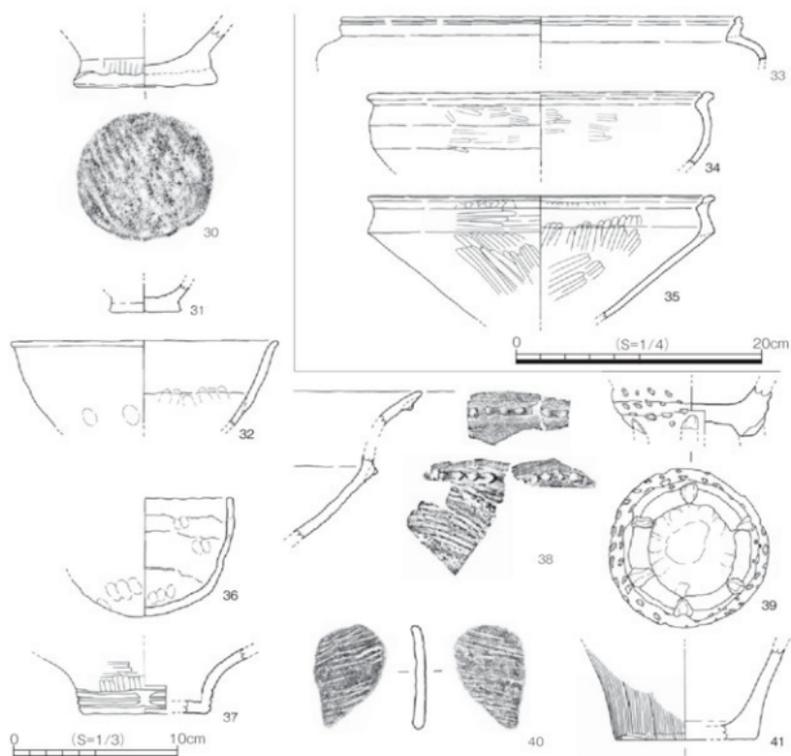
第49図 4層出土土器② (11・17 : S=1/4、12~16・18 : S=1/3)



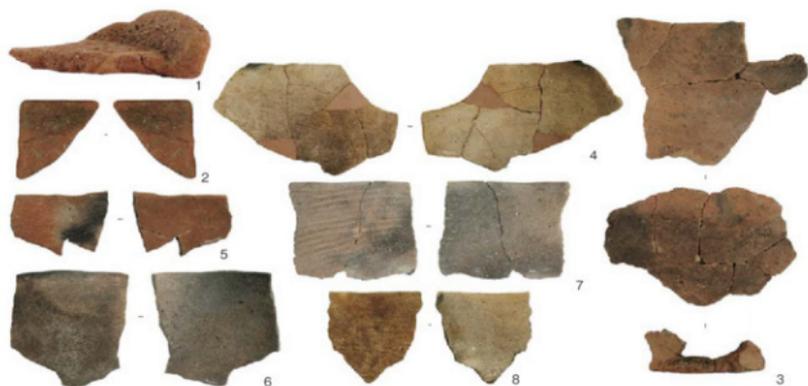
第50図 4層出土器③
 (19・20 : S = 1 / 3、21・22 : S = 1 / 4)



第51図 4層出土土器④ (23・24・27 : S=1/4、25・26・28・29 : S=1/3)



第52图 4层出土器⑤
(33~35: S=1/4、30~32·36~41: S=1/3)



图版68 4层出土器①



图版69 4层出土土器②



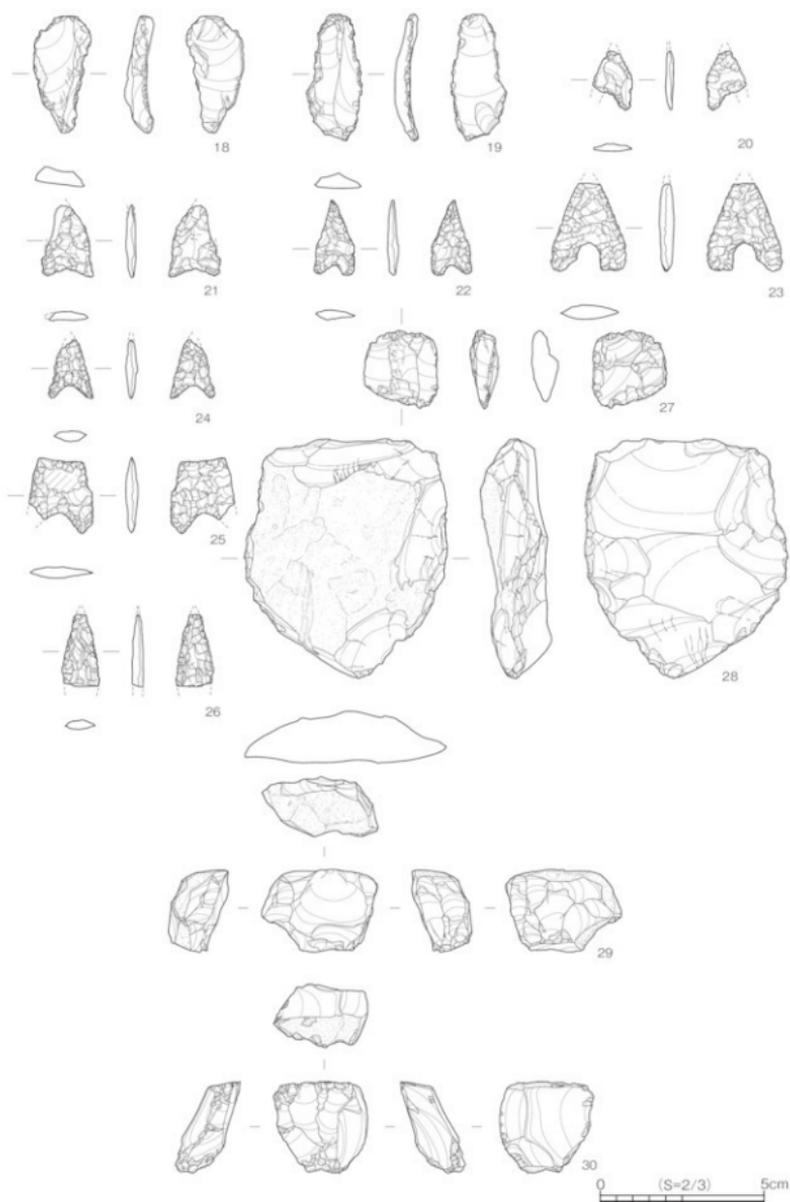
図版70 4層出土土器③

表21 4層出土土器観察表

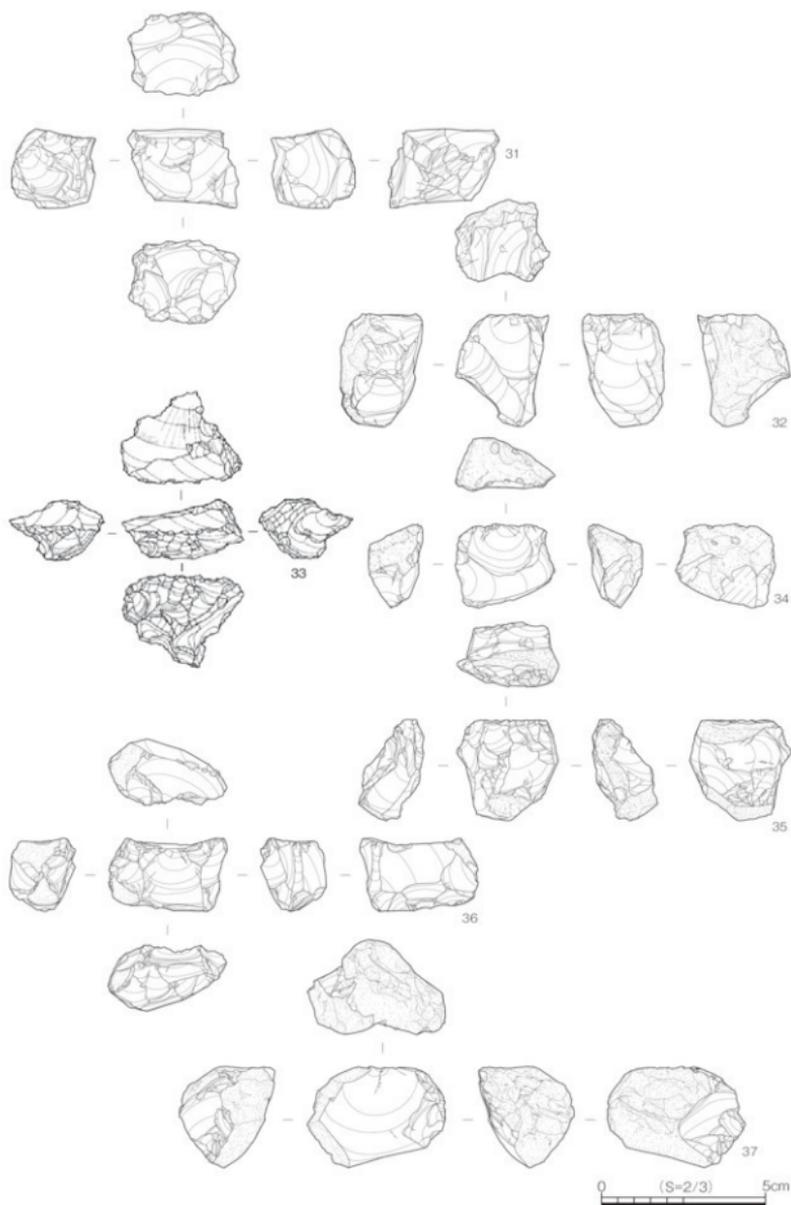
図版番号	出土層	器種	形状	胎色		装飾		用途		出土	備考
				外面	内面	外面	内面	用途	用途		
1	2層	4層 深鉢	底破	褐色胎色 (Hae2 SY95 4)	褐色胎色 (Hae2 SY95 4)	ナメ、縦線付	ナメ、縦線付	煮炊	焼石、灰石	板の下式	
2	3層	4層 深鉢	底破	褐色胎色 (Hae2 SY95 4)	褐色胎色 (Hae2 SY95 4)	ナメ	ナメ	煮炊	焼石、灰石、磨粉	板の下式	
3	3層	4層 深鉢	1180型-底破	12.45-黄褐色 (Hae7 SY97 4)	浅黄褐色 (Hae7 SY98 4)	目紋帯	ナメ	煮炊	焼石、灰石	板の下式	
4	2層	4層 深鉢	1180型-胴部	12.45-黄褐色 (Hae7 SY97 4)	浅黄褐色 (Hae7 SY98 4)	目紋帯	目紋帯	煮炊	石炭、磨粉、磨粉		
5	3層	4層 深鉢	1180型	褐色胎色 (Hae7 SY95 4)	褐色胎色 (Hae7 SY95 4)	目紋帯	ナメ	煮炊	磨粉、焼石、灰石	板の下式	
6	2層	4層 深鉢	1180型-胴部	灰褐色 (Hae7 SY95 2)	灰褐色 (Hae7 SY95 2)	素肌	素肌+ナメ	煮炊	石炭、磨粉、磨粉		
7	1層	4層 深鉢	1180型	褐色胎色 (Hae7 SY96 4)	褐色胎色 (Hae7 SY96 4)	目紋帯	目紋帯	煮炊	石炭、焼石、灰石		
8	1層	4層 深鉢	1180型	12.45-黄褐色 (Hae7 SY97 2)	12.45-黄褐色 (Hae7 SY97 2)	素肌	素肌+ナメ	煮炊	石炭、磨粉、灰石		
9	3層	4層 深鉢	1180型	12.45-黄褐色 (Hae7 SY97 2)	12.45-黄褐色 (Hae7 SY97 2)	目紋帯	ナメ、縦線付	煮炊	灰石、磨粉		
10	3層	4層 深鉢	1180型	12.45-黄褐色 (Hae7 SY97 2)	灰褐色 (Hae7 SY98 2)	素肌+ナメ	素肌+ナメ	煮炊	石炭、磨粉		
11	4層	4層 深鉢	1180型	12.45-黄褐色 (Hae7 SY97 2)	12.45-黄褐色 (Hae7 SY97 2)	目紋帯	ナメ	煮炊	灰石、磨粉	小笠原遺跡	
12	1層	4層 深鉢	1180型	褐色胎色 (Hae7 SY97 4)	12.45-黄褐色 (Hae7 SY97 2)	目紋帯	目紋帯	煮炊	石炭、灰石	寺山あり	
13	4層	4層 深鉢	1180型	褐色胎色 (Hae7 SY96 4)	灰黄褐色 (Hae7 SY96 2)	目紋帯	ナメ	煮炊	焼石、磨粉、石炭、灰石		
14	4層	4層 深鉢	1180型	褐色胎色 (Hae7 SY95 1)	褐色胎色 (Hae7 SY95 1)	目紋帯	横溝	煮炊	石炭、灰石		
15	4層	4層 深鉢	1180型	褐色胎色 (Hae7 SY96 4)	褐色胎色 (Hae7 SY96 4)	ナメ、縦線付	ナメ、縦線付	煮炊	石炭、磨粉、焼石		
16	2層	4層 深鉢	1180型	灰黄褐色 (Hae7 SY95 2)	12.45-黄褐色 (Hae7 SY97 2)	素肌+ナメ	ナメ	煮炊	焼石、磨粉、磨粉	1180型-横溝付	
17	2層	4層 深鉢	1180型-胴部	12.45-黄褐色 (Hae7 SY97 2)	12.45-黄褐色 (Hae7 SY97 2)	目紋帯	ナメ	煮炊	磨粉、焼石、灰石	1180型-横溝付	
18	1層	4層 深鉢	1180型	12.45-黄褐色 (Hae7 SY97 2)	褐色胎色 (Hae7 SY95 1)	目紋帯	目紋帯	煮炊	灰石、磨粉	横溝付	
19	1層	4層 深鉢	1180型	12.45-黄褐色 (Hae7 SY97 2)	褐色胎色 (Hae7 SY95 1)	目紋帯	目紋帯、縦線付	煮炊	灰石、磨粉		
20	2層	4層 深鉢	1180型-胴部	灰黄褐色 (Hae7 SY95 2)	灰黄褐色 (Hae7 SY96 2)	素肌+ナメ	素肌	煮炊	石炭、磨粉	1180型-横溝付	
21	2層	4層 深鉢	1180型-胴部	褐色胎色 (Hae7 SY95 4)	灰褐色 (Hae7 SY96 2)	目紋帯	ナメ	煮炊	石炭、灰石、焼石	1180型-横溝付	
22	1層	4層 深鉢	1180型-胴部	12.45-黄褐色 (Hae7 SY97 2)	褐色胎色 (Hae7 SY95 1)	素肌+ナメ	素肌+ナメ	煮炊	石炭、磨粉、焼石	横溝付、横溝・リボン状横溝	
23	2層	4層 深鉢	1180型-胴部	12.45-黄褐色 (Hae7 SY97 2)	灰褐色 (Hae7 SY96 2)	目紋帯	目紋帯	煮炊	灰石、磨粉		
24	4層	4層 深鉢	胴部	12.45-黄褐色 (Hae7 SY97 2)	褐色胎色 (Hae7 SY95 1)	ナメ	ナメ	煮炊	磨粉、焼石、磨粉		
25	1層	4層 深鉢	胴部	12.45-黄褐色 (Hae7 SY95 2)	褐色胎色 (Hae7 SY96 4)	素肌	素肌+ナメ	煮炊	石炭、磨粉、灰石	板の下のあり	
26	2層	4層 深鉢	胴部	褐色胎色 (Hae7 SY95 2)	灰褐色 (Hae7 SY96 2)	素肌+ナメ	ナメ	煮炊	磨粉、焼石、磨粉	板の下のあり	
27	4層	4層 深鉢	胴部-底破	12.45-黄褐色 (Hae7 SY97 2)	12.45-黄褐色 (Hae7 SY97 2)	目紋帯	素肌+ナメ	煮炊	磨粉、石炭	平皿	
28	1層	4層 深鉢	底破	褐色胎色 (Hae7 SY95 1)	褐色胎色 (Hae7 SY95 1)	ナメ	目紋帯	煮炊	磨粉、焼石、灰石	平皿	
29	1層	4層 深鉢	底破	褐色胎色 (Hae7 SY96 4)	灰褐色 (Hae7 SY96 2)	素肌	素肌+ナメ	煮炊	焼石、磨粉、灰石	平皿、灰皿(仁布ノ裏あり)	
30	4層	4層 深鉢	底破	褐色胎色 (Hae7 SY95 4)	褐色胎色 (Hae7 SY96 1)	ナメ	ナメ	煮炊	磨粉、焼石、灰石	平皿	
31	1層	4層 深鉢	底破	12.45-黄褐色 (Hae7 SY97 2)	褐色胎色 (Hae7 SY95 1)	目紋帯	ナメ	煮炊	石炭、磨粉、磨粉	1180型-横溝付	
32	1層	4層 深鉢	1180型	浅黄褐色 (Hae7 SY94 1)	褐色胎色 (Hae7 SY94 1)	ナメ、縦線付	ナメ	煮炊	灰石、磨粉		
33	2層	4層 深鉢	1180型	黄褐色 (Hae7 SY95 2)	12.45-黄褐色 (Hae7 SY96 2)	横溝	横溝	煮炊	灰石、磨粉		
34	2層	4層 深鉢	1180型	黄褐色 (Hae7 SY95 2)	灰黄褐色 (Hae7 SY96 2)	横溝	横溝	煮炊	灰石、石炭、磨粉		
35	2層	4層 深鉢	1180型-胴部	灰黄褐色 (Hae7 SY95 2)	灰黄褐色 (Hae7 SY95 2)	横溝、ナメ	横溝、ナメ	煮炊	灰石、磨粉、磨粉		
36	4層	4層 深鉢	1180型-胴部	12.45-黄褐色 (Hae7 SY97 2)	12.45-黄褐色 (Hae7 SY97 2)	ナメ	ナメ、縦線付	煮炊	焼石、石炭、灰石		
37	2層	4層 深鉢	底破	褐色胎色 (Hae7 SY95 4)	12.45-黄褐色 (Hae7 SY97 2)	横溝	横溝	煮炊	灰石、磨粉、磨粉	横溝付、十文字横溝	
38	2層	4層 深鉢	底破	褐色胎色 (Hae7 SY96 4)	褐色胎色 (Hae7 SY97 2)	ナメ	ナメ	煮炊	磨粉、磨粉	横溝付、横溝付	
39	2層	4層 深鉢	1180型-胴部	12.45-黄褐色 (Hae7 SY97 2)	褐色胎色 (Hae7 SY96 1)	ナメ	ナメ、目紋帯	煮炊	磨粉、磨粉	横溝付、横溝付	
40	2層	4層 深鉢	底破	褐色胎色 (Hae7 SY96 4)	12.45-黄褐色 (Hae7 SY97 2)	ナメ	ナメ	煮炊	石炭、磨粉、磨粉	横溝付、横溝付	
41	1層	4層 深鉢	底破	灰黄褐色 (Hae7 SY94 2)	灰黄褐色 (Hae7 SY95 2)	目紋帯	目紋帯	煮炊	灰石、磨粉	板の下のあり	
41	4層	4層 深鉢	底破	褐色胎色 (Hae7 SY96 4)	褐色胎色 (Hae7 SY97 2)	ナメ	ナメ	煮炊	灰石、石炭、焼石	横溝付、平皿	



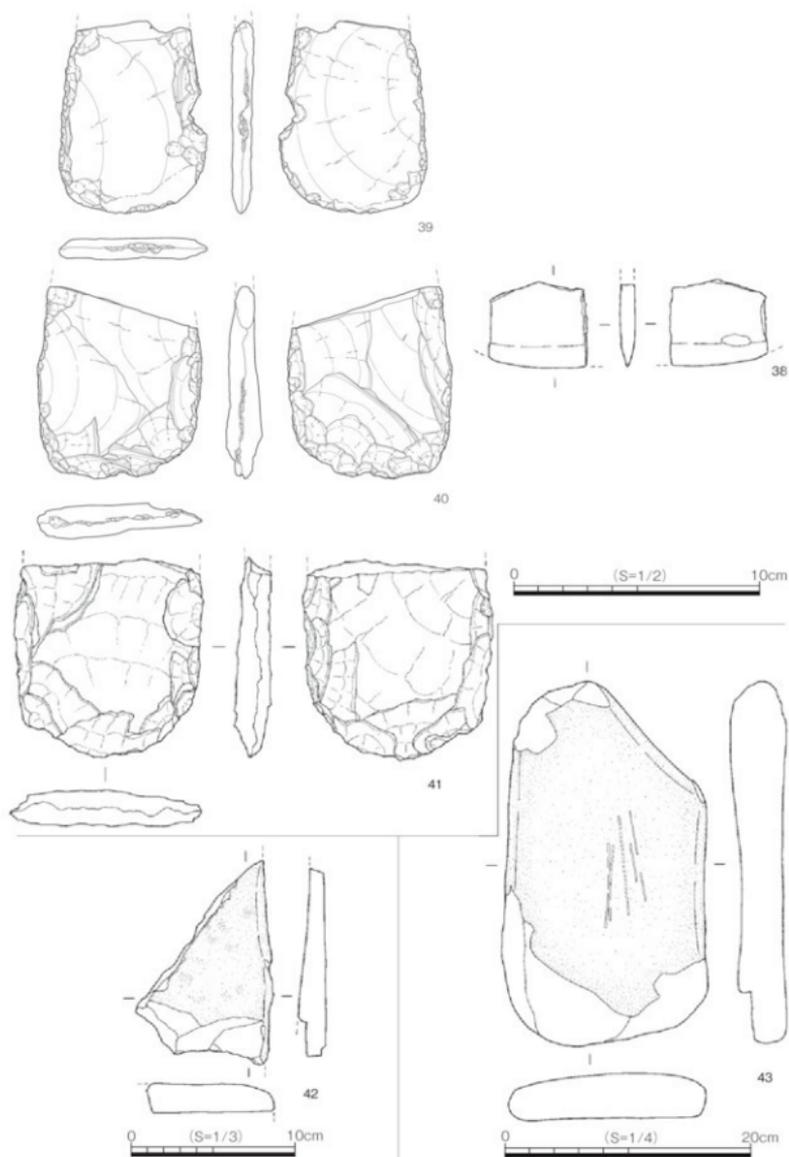
第53图 4層出土石器① (S=2/3)



第54図 4層出土石器② (S=2/3)



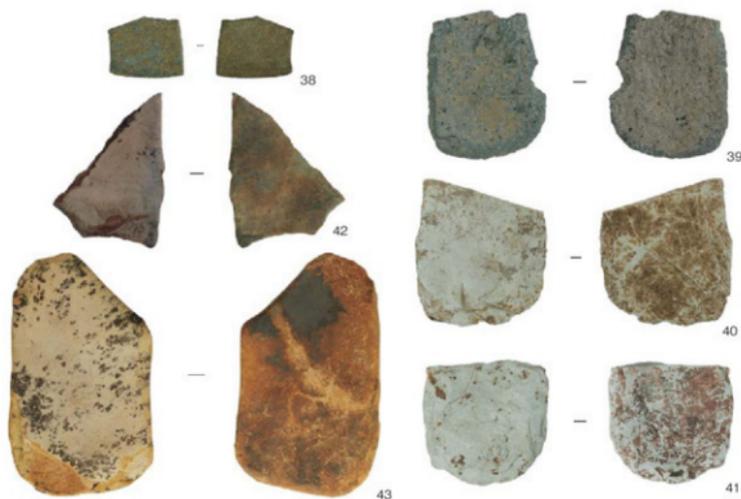
第55図 4層出土石器③ (S=2/3)



第56図 4層出土石器④
 (38~41: S=1/2、42: S=1/3、43: S=1/4)



图版71 4层出土石器①



図版72 4層出土石器②

表22 4層出土石器観察表

図版番号	出土地区	層位	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
1	4区	4層	剥片	黒曜石	33.3	16.5	5.0	2.08	
2	4区	4層	剥片	黒曜石	43.0	14.5	10.1	4.78	
3	4区	4層	剥片	黒曜石	31.5	24.0	10.0	6.45	
4	4区	4層	剥片	黒曜石	29.8	13.0	5.0	1.57	
5	4区	4層	剥片	黒曜石	19.6	10.2	3.2	0.66	左側下半部欠損
6	4区	4層	剥片	黒曜石	42.5	14.0	6.0	3.71	
7	3区	4層	剥片	黒曜石	44.0	21.4	10.0	6.57	
8	3区	4層	剥片	黒曜石	32.4	23.5	7.0	3.96	
9	3区	4層	剥片	黒曜石	40.0	26.4	11.9	8.79	
10	3区	4層	剥片	黒曜石	39.2	13.9	7.2	1.80	
11	3区	4層	剥片	黒曜石	37.0	19.7	9.0	3.36	
12	3区	4層	剥片	黒曜石	37.9	17.8	5.9	3.01	
13	2区	4層	剥片	黒曜石	41.9	12.5	9.0	1.94	
14	2区	4層	剥片	黒曜石	31.2	15.9	6.2	2.51	
15	2区	4層	剥片	黒曜石	51.0	28.5	9.5	9.76	
16	3区	4層	剥片	黒曜石	45.2	14.4	9.0	2.67	
17	2区	4層	剥片	黒曜石	23.5	5.8	3.4	0.39	
18	4区	4層	剥片	黒曜石	35.5	17.5	9.0	3.30	
19	4区	4層	剥片	黒曜石	38.6	17.0	7.0	2.94	
20	4区	4層	石鏃	黒曜石	17.8	12.5	2.5	0.41	先端部と片欠損
21	4区	4層	石鏃	黒曜石	22.0	15.5	3.0	0.73	左側縁から先端部にかけて欠損
22	1区	4層	石鏃	黒曜石	22.5	12.5	3.5	0.67	
23	1区	4層	石鏃	黒曜石	27.0	23.0	4.8	2.24	先端部欠損
24	2区	4層	石鏃	黒曜石	17.8	13.5	3.5	0.53	先端部欠損
25	2区	4層	石鏃	黒曜石	23.0	19.5	3.5	1.39	片欠損
26	2区	4層	石鏃	黒曜石	22.0	11.3	3.3	0.82	先端部、基部欠損
27	1区	4層	彫形石器	黒曜石	24.0	22.6	9.0	3.92	
28	2区	4層	スクレイパー	安山岩	73.3	61.8	21.0	88.81	
29	2区	4層	石核	黒曜石	25.5	35.2	18.2	14.13	
30	3区	4層	石核	黒曜石	28.0	28.4	20.0	10.09	
31	1区	4層	石核	黒曜石	24.5	33.6	25.1	22.69	自然面は残存しない
32	1区	4層	石核	黒曜石	34.5	28.0	25.0	23.95	凹縁を素材とする
33	4区	4層	石核	黒曜石	27.5	38.0	16.0	12.24	自然面は残存しない
34	1区	4層	石核	黒曜石	25.8	30.0	16.5	10.50	凹縁を素材とする
35	2区	4層	石核	黒曜石	30.7	30.7	20.0	15.47	角縁を素材とする
36	1区	4層	石核	黒曜石	22.4	35.8	20.0	16.15	角縁を素材とする
37	1区	4層	石核	黒曜石	30.8	42.0	29.0	31.31	凹縁を素材とする
38	1区	4層	石包丁	安山岩	(25.0)	(27.0)	4.5	(6.31)	両刃
39	1区	4層	打製石斧	安山岩	(78.4)	60.0	9.0	(54.67)	基部欠損
40	2区	4層	打製石斧	玄武岩	(78.1)	66.7	11.5	(67.32)	基部欠損
41	2区	4層	打製石斧	玄武岩	(57.5)	56.0	9.5	(49.35)	基部欠損
42	1区	4層	砥石	黒岩	(124.0)	(79.0)	19.0	156.6	頁岩か
43	2区	4層	砥石	砂岩	294.0	152.5	45.5	3075.0	

Ⅲ まとめ

今回の調査により、大きく分けて3つの時代の生活面が確認された。各時代の遺構や遺物ごとに分けて整理し、まとめていきたい。

1. 縄文時代

4層下層面（試掘調査時の4b層）に相当する。4層下層面は粘性がない砂質の層である。遺構は縄文時代晩期の深鉢を利用した埋壘を2基検出した。遺物は縄文時代中期後葉～後期前葉の坂の下式土器や後期初頭の南福寺式土器なども出土しているが、1～2点のみで、縄文土器の約9割を晩期のものが占める。他に、夜白式土器などの弥生時代早期に相当する土器も少量出土する。石器は、黒曜石製の剥片や石鏃、石核なども同じ層から出土しており、近い時期のものではないかと推測される。

2. 弥生時代

4層上層面（試掘調査時の4a層）に相当する。土は4層下層面に比べてかなり粘性が強い。遺構は弥生時代中期の須玖Ⅱ式土器を伴う竪穴建物跡2基を検出している。弥生時代の遺物は全体で約1割程度しか出土していないが、中期の須玖Ⅱ式土器が大半を占める。

その他に、第3層から船載鏡の破鏡が出土した。本県本土部では、これまで船載鏡の出土は8遺跡しかないため（半田2010）、貴重な発見であった。

3. 古代～中世（9世紀～12世紀後半）

3層に相当する。掘立柱建物跡2棟を検出しており、柱穴からは11世紀後半～12世紀前半の白磁皿と12世紀代の滑石製の鐙付型石鍋がそれぞれ出土している。包含層では、9～10世紀代の須恵器と多くの貿易陶磁が出土した。中でも龍泉窯系青磁碗のⅠ類がやや多く見られた。

4. 総括

縄文時代晩期の埋壘は、立小路遺跡から東に約700m程度 の場所に所在する葛城遺跡からも検出されている。埋壘が埋葬のための施設と考えると、これら2つの遺跡に生活拠点といえる遺構が見つからなかったため当該地とは考えられないが、当時の人々の活動域は、遺跡から遠く離れていない場所であったのではないかとと思われる。

次の弥生時代中期も竪穴建物跡を2基検出しているものの、出土した遺物も少量で建物としてもやや貧弱な印象を受けることから、住居として使用した可能性は低く、床面の大量の焼土からも考えられるように火を使う簡易な作業場だったのではないかとと思われる。立小路遺跡の北側に位置する川端遺跡では環濠と思われる溝が検出されており、こちらが生活圏だったのではないかと考えられる。

中世の遺構は掘立柱建物か北の竹松遺跡で検出された方形区画溝とほぼ同時期の遺構ではあるが、出土した遺物の量は竹松遺跡と比較すると圧倒的に少ない。このことから当該地は生活拠点だったとは考えられない。

調査地点が郡川によって形成された氾濫原に位置することや標高が若干低いことなどから、当該地は断続的に使われていた可能性や生活の主体が微高地上に位置していたことなどが考えられる。

引用・参考文献

- 久田松和則 1990『大村史－琴湖の日月－』国書刊行会
- 立神次郎 上東克彦編 1992『一寸原遺跡・干河原遺跡』加世田市埋蔵文化財調査報告書第9集 加世田市教育委員会
- 木戸雅寿 1995『石鍋』『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 福田一志 中尾篤志編 2005『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集 長崎県教育委員会
- 中尾篤志編 2006『肥賀太郎遺跡』長崎県文化財調査報告書第189集 長崎県教育委員会
- 本多和典編 2006『権現臨遺跡』深江町文化財調査報告書第2集 長崎県深江町教育委員会
- 東郷克利 抜水茂樹編 2007『上水流遺跡Ⅰ』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第113集 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 半田 章 2010『平成18年度調査区出土の鏡について』『門前遺跡Ⅲ 武辺遺跡Ⅱ』長崎県佐世保文化財調査事務所報告書第5集 長崎県教育委員会
- 大村市史編さん委員会 2014『新編大村市史 第一巻 自然・原始・古代編』大村市
- 安樂哲史編 2016『竹松遺跡』大村市文化財調査報告書第41集 大村市教育委員会
- 浦田和彦編 2016『黒丸遺跡』長崎県文化財調査報告書第215集 長崎県教育委員会
- 浦田和彦編 2017『平野遺跡』新幹線文化財調査事務所報告書第2集 長崎県教育委員会
- 山梨千晶 中川潤次編 2017『小路口遺跡』長崎県文化財調査報告書第213集 長崎県教育委員会
- 山梨千晶 中川潤次編 2017『竹松遺跡』長崎県文化財調査報告書第214集 長崎県教育委員会
- 中尾篤志編 2017『上三反田遺跡』新幹線文化財調査事務所報告書第3集 長崎県教育委員会
- 川畑敏則 中川潤次 中尾篤志他編 2017『竹松遺跡Ⅱ』新幹線文化財調査事務所第5集 長崎県教育委員会

本書の作成にあたり以下の文献や調査報告書を土器等の編年・分類の基礎資料として用いた。

- 縄文土器：中尾篤志 2006『肥賀太郎遺跡』長崎県文化財調査報告書第189集 長崎県教育委員会
- 本多和典 2006『権現臨遺跡』深江町文化財調査報告書第2集 長崎県深江町教育委員会
- 水ノ江和同 2012『九州縄文文化の研究』雄山閣
- 弥生土器：柳田康雄 2002『九州弥生文化の研究』学生社
- 福田一志 中尾篤志編 2005『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集 長崎県教育委員会
- 土師器：柳田康雄 2002（初出1991）『九州土師器の編年』九州弥生文化の研究』学生社
- 福田一志 中尾篤志編 2005『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集 長崎県教育委員会
- 須志器：舟山良一編 2008『牛頭窟跡群 総括報告書』大野城市文化財調査報告書第77集 大野城市教育委員会
- 貿易陶磁：山本信夫 2000『大宰府条坊跡 XV－陶磁器分類編－』大宰府市文化財調査報告書第49集 大宰府市教育委員会
- 石鍋：木戸雅寿 1993『石鍋の生産と流通について』『中近世土器の基礎研究9』中世土器研究会
- 木戸雅寿 1995『石鍋』『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 近世陶磁：九州近世陶磁学会事務局 2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会

報告書抄録

ふりがな	たてしょうじいせき							
書名	立小路遺跡							
副書名	都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	Ⅲ							
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第216集							
編著者名	小松義博							
編集機関	長崎県教育委員会							
所在地	〒850-0058 長崎県長崎市尾上町3番1号 TEL095-824-1111							
発行年月	西暦2018年3月							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
立小路遺跡	長崎県 大村市 鬼橋町1169番地 ほか	42205	089	32° 56' 42"	129° 57' 13"	20160616～ 20161129	1700	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
立小路遺跡	包含地	縄文晩期 弥生 古墳 古代 中世	埋蔵 竪穴建物 掘立柱建物 土坑	縄文土器 石器 弥生土器 土師器 須恵器 貿易陶磁 舶載鏡（破鏡） ガラス玉		立小路遺跡範囲の北側に位置する。周辺に環濠と思われる溝が確認された川端遺跡があることから、今回の調査範囲は生活の中心地から、少し外れた位置と考えられる。		

長崎県文化財調査報告書第216集
都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

立小路遺跡

平成30（2018）年3月発行

発行者 長崎県教育委員会
〒850-0058 長崎市尾上町3番1号
TEL095-824-1111

印刷所 株式会社 昭和堂
長崎県諫早市長野町1007-2
TEL0957-22-6000